

国立大学法人電気通信大学 / The University of Electro-Communications

中世ロシア文学図書館 (VII) : アポクリファ2

著者	三浦 清美
雑誌名	電気通信大学紀要
巻	28
号	1
ページ	21-47
発行年	2016-02-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1438/00006824/

中世ロシア文学図書館(VII) アポクリファ②

三 浦 清 美

The Medieval Russian Library(VII) Apocrypha ②

Kiyoharu MIURA

Abstract

Apocryphas are, in biblical literature, works outside accepted canon of the scripture. They arrived in medieval Russia through Slavonic translation of Byzantine literature. The author in this bulletin provides the translations and the commentary of following five medieval slavonic apocryphas. Their outlines are as follows:

- (1) A Story of Akir the wise: Akir, an able minister and counsellor of Assyrian Empire, had been plotted by his nephew and sentenced to death by his king. However, a friend of Akir gave him shelter in his own house. In absence of Akir an Egyptian pharaoh gave hard problems to the Assyrian king and threatened to send troops if Assyrians could not solve them. The Akir's friend confessed to their king that Akir was alive and Akir, who was then forgiven, solved the pharaoh's problems. Akir took revenge on his nephew. The minister Akir was mentioned in "the Book of Tobit" of the Old Testament.
- (2) An Eriphery's Story of twelve Fridays: Friday is a special day for Christians because Jesus Christ was crucified on Friday. This story explains why and how in a calendar twelve special Fridays should be venerated.
- (3) A Story of Melchizedek: Melchizedek, "a king of justice" in Hebrew, is an enigmatic character in Holy Scripture. This story describes how Melchizedek was born and hidden in the background of Holy Scripture.
- (4) An Aphroditian's Story: The episode of the arrival of three magi is popular theme of the New Testament. This story is based on that episode of the Holy Scripture, and describes how in the East, that is, in Persia three wise men came to be sent to Bethlehem to celebrate the birth of Jesus Christ.
- (5) A Story on the King Abgal: Abgal, a king of Edessa in Osroena kingdom, was suffering from leprosy, and wished Jesus Christ to come to Edessa to realize a miracle. Jesus, instead of himself coming, sent him a towel, with which Jesus wiped his face and in which the shape of his face was left. This was believed in the Christian world to be the first icon of the Savior. This story is the incarnation of the idea on icons "acheiropoietos = made not by human hands".

目次

(1) 至賢アキルの物語	22 頁
(2) エリフェリイの12の金曜日についての物語	33 頁
(3) メルキセデクについての物語	37 頁
(4) アフロディティアンの物語	40 頁
(5) アプガル王についての物語	43 頁

(1) 至賢アキルの物語

〈解説〉

スラヴのアキルにかんする物語の原型となった『アヒカル物語』は、紀元前7世紀にアッシリアで創作されたとされる。物語の主題は東方でよく知られており、シリア語、アラビア語、アルメニア語の諸バリエーションが残っている。A.A. マルティロシヤンの説(1970年にエレバンで出版された博士論文の概要)によれば、スラヴの地にはキエフ・ルーシの時代に伝播し、原典はアルメニア語版であった。

ルーシでは、『至賢のアキルの物語』はいくつかの編纂本で知られていた。外国語から翻訳である編纂本が、最古版と名づけられている。このほかソロヴェツキイ編纂本が存在し、17世紀の二つの編纂本、短縮版と普及版が存在する。これらの新しい編纂本では、『物語』のテキストは本質的にあらたに語りなおされ、新しい主題のモチーフが導入され、個々の細部とイメージはこれらの編纂本をロシアの民衆おとぎ話に近いものとしている。

ここに刊行されるのは、『物語』の最古編纂本である。この編纂本は、新しい時代には4つの写本、ロシア国立図書館所蔵ロシアの古代歴史協会(ОИДР)189番15世紀、国立歴史博物館 ヴァフラメエフ集成427番15世紀、国立歴史博物館フルドフ集成246番17世紀、そして、4番目の写本は散逸した。これは、A.И. ムーシン・プーシキンのあの『イーゴリ軍記』を所蔵していた写本である。このほか、16-17世紀のソロフキ写本は散逸したが、H.H. ドゥルノヴォによって刊行されている(H. ドゥルノヴォ『古いロシア文学の史料と研究 1 アキルの物語歴史について』)。最初の3分の2のテキストは、最古版とほぼ同じである。ОИДР版、ヴァフラメエフ版、フルドフ版は、A.Д. グリゴリエフのモノグラフ(Григорьев А. Д. Повесть об Акире Премудром. М., 1913)で公開された。

ここでの翻訳の原本となった刊行テキストは、ОИДР写本である。この写本は残ったすべての写本のなかで唯

一完全なものであるが、書き間違い、抜かし、機械的な繰り返しなどの多くの誤りを含む。意味の理解を困難にする明らかな間違いは、ヴァフラメエフ版、フルドフ版、ソロフキ版のテキストによって訂正をほどこしている。まれではあるが、ほんの少し文字を書き替えることで意味をとおりやすくした場合もある。

テキストはすべて刊行されている。写本のなかで間違っていて繰り返された語や語句だけを取り除き、解釈ができない誤った読みを省略することはできるだけ少なくした。これらの場合はすべて、省略した部分は鉤括弧に傍点をつけてある。意味のわからない箇所の翻訳にかんしては、アルメニア版の『アキルの物語』を参照した。この場合は、注に言及されている。

〈翻訳〉

シナグリフが、アドルとナリヴァの王¹であったころ、私、アキルはその顧問官を務めておりました。神から私にお告げがありました。「お前からは子どもが生まれないだろう。」あらゆる者たちよりも多くの財産をもち、妻を娶り、邸宅を構え、60年間生きましたが、私には子供がありませんでした。奉獻台を供え、火を灯し、私は言いました。

「主なるわが神よ！私が死に、後継者を残さなかったら、人々はこう言うだろう。『アキルは正しい人で、誠をもって神に仕えたが、死んでみたら、その墓を守る男の子も、慕って泣く女の子もない。彼のあとに財産を相続する者もいなければ、後継者もない』と。だからいま、主なるわが神よ、私はそなたにお祈りいたします。どうか私に男子をお与えください。私が死ぬときに、その子は私の目に土をかけてくれるでしょう。」

すると、主は私の願いを聞きました。天から私に声が下り、こう言いました。「アキルよ。お前の願いなら何なりとかなえてとらせるが、子どもを、という願いだけはかなえることができない。だが、お前の姉妹の子、アナダンがいる。この子を子どものかわりにするがよい。」

主からの声を聞くと、ふたたび大声で叫びました。「主よ、わが神よ、もしも私に男の子がいれば、私が死ぬ日、私の目に土塊を投げてくれるでしょう。私が死ぬ日まで一日に1ケンティナルの金を自分が使うために与えたとしても、私の家は蕩尽されることがないでしょう。」すると、私に声はありませんでした。私は主の言葉を受けいれ、自らの姉妹の子、アナダンを息子として引き取りました。アナダンはまだ幼かったので、乳を含ませ、蜜と葡萄酒の食事をあたえ、絹と錦を身にまとわせ、長じるにおよんであらゆる学問を学ばせました。

¹ おそらく、ここで言及されているのはセンナケリブ(紀元前704-681)で「アッシリアとニネヴェの王」。アドルがアッシリアで、ナルヴァがニネヴェである可能性がある。

そして、あるとき王は私に言いました。「おお、アキルよ、至賢の顧問官、わが宰相よ。そなたが年若い、他界したとき、余は誰をわが宰相に迎えればよいのか。」

私はこう答えました。「王よ、永遠に命あれ。私には、私と同じような息子がいます。その子は賢く、私はあらゆる知恵と知識をその子に教えました。」すると、王は私に答えました。「余のもとに、自らの息子連れてくるがよい。余がじかに人物を見よう。もしも余の目になうならば、その時はそなたが家に帰ることを許す。そなたは自らの老いの日々を安らぎのなかで過ごすであろう。」

私は自らの息子アナダンを連れ、ツァーリのまえに伺候しました。ツァーリはアナダンを見て答えて言いました。「今日のこの日は、アキルにとって栄えあるものとなるだろう。なぜなら、アキルは余が生あるうちに自らの息子を余のまえに目どおりさせたからである。」私は王に跪拝しました。「私が陛下の父とそなたにいかにお仕え申したか、陛下ご自身がよくご存知です。いまはこの子が成人するのを待ってください。陛下の慈愛がわが老年にありますことを。」王は私の言葉を聞くと、私に誓言しました。「そなたの財産はほかの誰も相続することができない。」

私、アキルはこの子どもを教えることをやめませんでした。パンと水を与えてお腹いっぱいになるように、私の教えをたっぷり与えました。私は彼にこのように言ったものです。

「人よ、主の子、わがアナダンよ。私の言葉をよく聞くがよい。そなたの生涯のあらゆる日々において、あらゆる教えにしたがって身を正すこと。王から聞くこと、王の家で見ることはそなたの心のなかで朽ちゆくにまかせ、他言してはならぬ。もしも話したならば、熾った炭火のごとくその言葉はそなたを焼き、そなたの身体は損なわれるであろう。」

息子よ、聞いたことを誰にも話してはならぬ。見たことを暴いてはならぬ。結ばれた縄は解いてはならぬ。解かれた縄は結んではならぬ。

息子よ、女性の美しさに見入ってはならぬ。心の底から女に恋い焦がれてはならぬ。すべての財産を女にあたえたとしても、女からは何の益も得ることはなく、神にたいして罪を犯すことになる。

子よ、人間の骨のように頑なになってはならぬ。豆のさやのように柔らかくありなさい。

息子よ、おまえの目はよく下を見て、おまえの声を低めなさい。もしも大きな声で屋敷が建つならば、ロバは自分の鳴き声で1日に2軒の屋敷を建てるだろう。

息子よ、馬鹿者と葡萄酒を飲むよりも、賢い人々と岩を動かすほうがましだ。理知ある者とともにいるときには馬鹿げたことをするな。愚か者とともにいるときには自分の知恵をひけらかすな。

際限なく甘くなつてはならぬ。そうしたら、おまえは食われるだろう。際限なく苦くなつてはならぬ。そうであれば、おまえの友人がおまえを避ける。

息子よ、もしもおまえの足に靴を履いているならば、茨を踏みつけ、息子や娘たちのために道をつくれ²。

子よ、裕福な男の蛇を食べたら、『病気を治すために食べた』というだろうが、貧しい男の息子が蛇を食べたなら、『空腹だから食べた』というだろう。

息子よ、自分の取り分をあたえ、他人の取り分には手をつけるな。

助言を聞きいれぬ男と道を歩くな。人を瞞す男と同じ食卓で食事をするな。

息子よ、おまえより身分の高い者がおまえにつらくあたるなら、手放して喜んで自分の友人のまえでその人の陰口を言ったりしてはいけぬ。おまえの言葉がその人の知るところとなったとき、その人は怒っておまえに復讐するだろう。

息子よ、誰かが出世したとしても、羨むな。その人が不幸になったとしても喜ぶな。

息子よ、愚かな女、おしゃべり女、傲慢な女に触れてはならぬ。女の美しさを渴望してはならぬ。女の美しさは、言葉の健やかさに存するものだ³。

息子よ、もしもおまえの友人がおまえを憎み、おまえを罵倒し、石を投げつけたとしても、おまえはパンと塩でその者を出迎えるがよい。最後の審判の日に、二人の行いによって報いがあるだろう。

息子よ、愚かな男には転落が待ち受け、正しい男は立ち上がる。

息子よ、自分の息子を打擲するのをためらってはならぬ。息子に傷を負わせたとしても、葡萄園に水を注ぎかけるようなものだ。なぜなら、息子というものは打擲によつては死なぬが、もしもおまえがその躰に無関心でいるなら、何か別の災厄をもたらすものだ。

子よ、自分の息子を子どものころからおとなしく躰けよ。もしもおとなしく躰けられないなら、その息子ははやく老けこむ。

息子よ、不遜な奴隷を買ってはいけぬ。ずるがしこい女奴隷を買ってはいけぬ。財産を蕩尽しないために。

子よ、もしも誰かが自分の友人の悪口を言ったとしても、その者の言うことに耳を貸してはいけぬ。なぜな

² この一節は、ロシア語の諸テキストが損なわれているので、アルメニア語版をとおして解釈した。

³ この一節は、アルメニア語版のテキストに拠った翻訳。

ら、この者は他の者におまえのことを悪く言うからだ。

子よ、もしも誰かがおまえと会い、おまえに向って話しかけるなら、言葉を選んで答えるがよい。なぜなら、人は軽々しく言ってしまった言葉をあとになって後悔するのだから。

子よ、嘘つきの人間ははじめはとても愛されるが、最後には事態を紛糾させ、ごうごうたる非難を浴びせられる。嘘つきの人間の言葉は鳥のさえずりのごとくで、頭の足りない者が真に受ける。

子よ、自らの父を敬いなさい。なぜなら、すべての財産をおまえのために残すのだから。

息子よ、父と母がおまえを呪わないようにしなさい。さもなければ、おまえは自分の子供たちから喜びを得られない。

おまえが邪悪な憤怒に囚われたとき、よこしまな言葉を口にしてはならぬ。そうすれば、おまえは愚か者といわれるだろう。

息子よ、武器を身につけず夜道を歩くな。なぜなら、誰がおまえと会うか、誰もわからないからだ。

子よ、実をたわわにつけた樹木は、どんなに太い枝でもしなるものだが、それは美しい光景である。自分の近親者たちと友人らに囲まれているのは、この光景に等しい。獅子は強いからこそ恐ろしいが、男は近い者に囲まれているがゆえに信頼される。子供と近親者に恵まれぬ生まれつきの者は、敵を前にしても弱い。それは道端に立つ木に似ている。傍を通る者たちがみなそれを折る。

息子よ、『私の主人は愚かで、私は賢い』と言ってはならない。自分の主人の教えを守りなさい。そうすれば、寵愛を受けるだろう。自分の知恵を頼んではならない。耐えることができるなら、耐えなさい。邪悪なこと言ってはならない。

子よ、言葉少なくあれ。そうでなければ、自分の主人のまえで罪を犯すことになる。

子よ、使節の務めをあたえられて派遣されるときには、一刻の猶予もなく行くがよい。そうでなければ、おまえのあとに別の者が派遣される。

息子よ、おまえの主人が『私のまえから下がれ。悲しむがよい』と言わぬように。おまえの主人が『近くに寄れ。喜ぶがよい』と言うように。

息子よ、祝日に教会のまえを通り過ぎてはならぬ。子よ、どこかの家で不幸があったときには、その不幸を放っておきなさい。他人の家に酒宴に行ってはならない。まず悲しむ人々を訪れてから、そのあとに酒宴に行き、自分も死がまぬがれないことを心に留めなさい。

息子よ、馬をもつな。他人の馬にも乗るな。もしも振り落されれば、嘲笑われる。

腹が減っているのでなければ、食べ物を食べすぎてはいけない。そうでなければ、おまえは大飯ぐらいと呼ばれるだろう。

おまえよりも強い者と争ってはならない。知らぬまに相手がおまえを面白からず思っ含むところをもつから。

息子よ、もしもおまえの屋敷が高くそびえるなら、壁は低いままにしておくがよい。そこに入るなら、自らの知恵はいやが応にも高まる⁴。

息子よ、自分の憤怒を抑えなさい。その忍耐ゆえに、おまえは神の恩寵を見出す。

大きな目方をもつ者からとって小さな目方の者に売ってはならない。そして、『これは私にとって利益である』と言ってはならない。これは悪いことだからである。それを見た神がおまえにたいして怒りをいだき、おまえの家を無法者のそれのように滅ぼすと誰が知ろうか。

子よ、神の名前において偽りを誓ってはならない。おまえの生きる日々数が少なくならないように。

子よ、神にお願いしたことは、忘れてはならない。不注意者ようになってはならない。覚え、注意深くあれ。そうすれば、祝福されるだろう。

長子を大切にし、年下の子を退けよ。

もしも神から靈感をあたえられていなければ、どんなに懸命にやっても、何事も成就しないだろう。

貧しい者は豊かになることがあり、豊かな者は貧しくなることもある。貴顕が転落することあれば、身分の低い者が成り上がることもある。

子よ、悲しむ者のところに言って慰めの言葉をかけるがよい。それはたくさんの金よりもまさるからだ。

子よ、金や銀を羨んではならぬ。誰かを誹謗してはならぬ。それにたいして、神からも人間からも報いがある。

子よ、罪なくして血が流れることはない。この報復者は神だからである。

息子よ、唇を誹謗から、手を窃盗から遠ざけよ。盗むものが金であっても衣服であっても、いずれも悪行であることに変わりはない。

息子よ、放蕩女から身を遠ざけよ。有夫の女ならなおさらである。さもなければ、神の怒りがおまえに下る。

息子よ、もしも知恵ある人の言葉を聞くなら、喉がからからに渴いた日に冷たい水を飲むことと同様である。

息子よ、不幸や災難がおまえを襲ったとしても、神を咎めだてしてはならぬ。おまえが神に打ち勝つことはありえぬし、神はおまえの咎めだてを聞き、真実にしたがっ

⁴ この部分のロシア語テキストの意味は不明である。アルメニア語版ではおおよそ以下のような意味である。「子よ、もしもおまえの家の扉が高く、それが7ロコチ（3メートル50センチ）もあったとしても、おまえはそこをとって家に入るとに、頭をかかえなければならぬ。子よ、大きな目方をもつ他人からとって、それを小さな目方をもつ者にわたしてはならない。そして、『おれは儲けた』といってはならない。」

ておまえに復讐するだろうから。

息子よ、正義の裁き手であれ。おまえが老年に達してもなお、尊敬を受けるだろう。

息子よ、おまえの言葉が早くあれ。口を開くときには優しい言葉を言え。

子よ、賢い人間はどんな言葉を言おうとも心に残るが、愚か者の言葉は、鞭を打たれようと、何も学ぶものがない。

息子よ、賢い人間を使者として旅に送り出しても、詳しく指示をあたえる必要はないが、愚かな者を使者に立てると、おまえ自身が跡を追って恥をかかないように配慮する必要がある。

息子よ、自らの友人と食事と酒で誘惑してはならぬ。そうすれば、友はますます正道を外れるであろう⁵。

息子よ、おまえが食事に招かれたなら、一度目の誘いでは応じずに、ふたたび呼ばれたときに、おまえの名誉が損なわれないか十分確かめたうえで、出かけるがよい。

息子よ、賄賂を受け取ってはならない。なぜなら、賄賂は裁判官の目を晦ますから。

私は苦いもの、酸っぱいものを味わったが、何ものも貧困とは比べものにはならない。

息子よ、借りた金を返すより、塩や錫を運ぶほうがたやすい⁶。

息子よ、私は鉄と石をもちあげたが、法律を知り親しい者と訴訟沙汰におよぶ男より楽だった。

息子よ、知り合いとともにいるときは、自分の困窮を知られないようにしなさい。さもなければ、おまえは罵られ、言うことを聞いてもらえなくなる。

子よ、全知全霊をかけて自らの妻を愛しなさい。なぜなら、妻はおまえの子らの母であり、おまえの生涯に寄り添って暮らすからである。

子よ、息子に教育をほどこすときには、まず何よりも忍耐を教えよ。彼が成人したとき、忍耐を知って生きるからである。

息子よ、おまえの家でたいして原因もなく喧嘩をはじめてはならない。家をかき乱してはならない。そうすれば、隣人から誇りを受ける。

息子よ、素面の愚か者のいうことを聞くより、酔っぱらった賢者のいうことを聞くほうがよい。

子よ、心が盲であるより、目が盲であるほうがよい。目が盲の者は道を歩く場合でも、慣れていて道を見つけるすべを知っているが、心が盲の者は道を踏み外し、道に迷ってしまうからである。

息子よ、女にとって他人の子を養うより自分の子が死

ぬほうがよい。なぜなら、女が他人の息子によいことをおこなっても、その子は彼女に悪で報いるからである。

息子よ、信仰を知らない自由人よりも、信仰を知る奴隷のほうがよい。遠くに住む親戚よりも、おまえの近くにいる友人のほうがよい。

息子よ、名と誉れのほうが人間にとって、顔の美しさより大切である。なぜなら、誉れは永遠につづくが、顔は死ののちに朽ちる。

息子よ、人間にとってつらい生より名誉ある死のほうがよい。

息子よ、他人の手のなかにある羊の足よりも、自分の手のなかにある羊の足のほうがよい。遠くの雄牛よりも近くの羊のほうがよい。大空を飛ぶ幾千の鳥よりも、手のなかに捕まえたスズメのほうがよい。おまえが所有しない毛糸の服よりも、おまえの所有している麻の服のほうがよい。

息子よ、友人を宴に招くなら、晴れやかな顔で招きなさい。そうすれば、友人は晴れやかな心で自分の家に帰る。

息子よ、友人と食事をともにするときには、不満足な顔をした者の隣りに座ってはいけない。この宴がおまえにとって恥となり、ならず者と呼ばれないように。

息子よ、その所業をわからぬうちに人間を祝福するな。他人を非難するな。十分にわかったうえで答えなさい。

悪い女とともに暮らすよりも、火で焼かれるか、熱病で苦しむほうがましである。家のなかに光がなくなるからである。悪い女に心のうちにあることを知られてはならない。

息子よ、誰かに言葉をかけようとするなら、無駄なことをいってはならぬ。自分の心のなかでよく考え、必要なことを言いなさい。舌でしくじるより、足でしくじるほうがましである。

息子よ、友人たちといるときには、彼らに向って笑ってはならない。笑いからは愚かしさが生じる。愚かしさからは言い争いが生じる。言い争いからは罵り合いと殴り合いが生じる。殴り合いは死につながる。死はまさに罪である。

息子よ、賢くありたいなら、酒を飲んでも多言になるな。そうすれば、賢い者といわれる。

息子よ、公平に裁くことができないなら、偽善者と呼ばれ、生きる日々が短くなる。

息子よ、無知な者を嘲笑うな。そうした者から遠ざかれ。神に見捨てられた者を嘲笑うな。なぜなら、そうした人も人間だから。息子よ、自分の金を証人のないところ

⁵ テキストが損なわれている。アルメニア語版は次のようになっている。「息子よ、自らの息子を飢えと渇きで試すがよい。もし彼がこれに耐えることができたなら、そのとき自らの富を彼の手になすがよい。」

⁶ アルメニア語版では、テキストは次のようになっている。「私は塩をもちあげる。私は鉛をもちあげる。だが、それは借金ほど重くはなかった。」すなわち、自分が借金していることを自覚するのはつらいという意味である。

ろで徒に引きわたすな。そうすれば、金を失うことになる。

息子よ、賢者の言葉を聞きたいなら、無知な者を近づけるな。おまえにはその必要がない。

息子よ、おまえに何も悪いことをしないなら、古い友人を追い払うな。そんなことをすれば、新しい友人がおまえを追い払う。

息子よ、同じ食卓を囲んで、自らの友にたいし悪しきことを考えてはいけな。そうすれば、おまえの口のかなかの食べ物がますぐなる。

息子よ、自分の主人を敬え。貴顕を引きずりおろしたり、身分の低い者を引きあげたりせず、言われたことをおこなえ。

息子よ、裁き手の葡萄園に入ってはならぬ。愚かな女とつるんだり、語らったりしてはならぬ⁷。

息子よ、偽りの言葉ははじめは錫のように重い、あとになって水面に浮かび上がる。

息子よ、自らの友人を試せ。彼に自分の秘密を打ち明け、多くの日数が経ったのち、この者と言い争ってみるがよい。もしもこの者がおまえの秘密を暴露しないならば、この者を心を尽くして愛せよ。おまえがこの者が真の友人であることがわかったからである。もしも秘密を暴露したならば、この者とは縁を切り、二度とこの者のところに戻るな。

子よ、自分が盗人といわれるより、ほかの者に盗みをされたほうがよい。

息子よ、王のまえで自らの友人の弁護をするなら、それは獅子の口から咥えられた羊を取り返すに等しい。

息子よ、旅に出るときは、他人の食べ物を当てにしてはならない。自分の食べ物を所持しなさい。もしも自分の食べ物をもたずに旅に出るなら、おまえは非難される。

息子よ、おまえを憎む友人が死んだとしても、喜んではならない。その者が生き残って神から懲罰を受けたほうがよいからだ。おまえから赦しを得ようとするなら、それをその者にあたえなさい。このためにお前は神から褒賞を受ける。

息子よ、老人を見たら、そのまえに立ちなさい。このことでこの老人が何もあたえなかったとしても、神から祝福を受けるであろう。

息子よ、もしも友人を食事に招くなら、かれにほかの用事もちだすな。そうすれば、おまえは嘘つきといわれるだろう。

息子よ、水が上のほうに流れ、鳥が尾を前にして飛び、エチオピア人やサラセン人の肌が白くなり、胆汁が蜜のように甘くなったときに、愚か者は知恵を学ぶ。

息子よ、隣人のところにお呼ばれし、屋敷のなかに入っても、隅々に目を配ってはいけな。それはおまえのた

めにならない。

息子よ、誰かが裕福になっても、羨んではならない。むしろ能うかぎり、敬意を払うがよい。

息子よ、不幸のあった家に入ったとき、飲み物や食べ物のことを話してはいけな。もしも祝いの席にすわったなら、災難を忘れなさい。

息子よ、人間の目は湖のようである。どれだけ金が積まれようと、満足することがない。人間は死ねば塵には困らない。

息子よ、おまえが財産をもっていたとしても、飢えや渇きで死なないように気をつけなさい。おまえが死んだら、財産はほかの者の持ち物となり、あらゆることに喜ぶことであろう。そうしたら、おまえがあくせく働いても無駄だったことになる。

息子よ、貧困にある人間が盗みを働くなら、その者を許しなさい。なぜなら、それはこの者が行ったことではなく、貧困が強いたものだからである。

結婚の宴席に臨んだら、長居をしてはならない。おまえが自分の意志で立ち去るまえに、相手はおまえを追い出しにかかる。

息子よ、友人のところへは頻繁に行ってはならない。そうすれば、友人はおまえを敬わなくなる。

息子よ、おまえが新しい服を着て、よい身なりになったなら、他人の様子を羨んではならぬ。身なりのよい人の言葉は重んじられるからである。

息子よ、財産をもっていようともってまいと、悲しみに沈んではならぬ。悲しみがどんな得をおまえにもたらすというのか。

息子よ、犬がその主人を捨ておまえのあとをついてきたことに気づいたなら、石をとってその犬に投げつけなさい。そんな犬はおまえを捨て別の人間についていくことになる。

息子よ、隣人がおまえを嫌うようになっても、おまえはいっそう隣人を愛しなさい。おまえの知らないところで、その隣人がおまえに迷惑をかけないように。

息子よ、もしもおまえの敵がおまえに善をほどこそうとしても、すぐにそれを信じてはならない。相手はおまえを嬉しがらせて自分の憤怒をおまえに向けてくるかもしれないから。

息子よ、もしも誰かが悪い性根のために罪を犯すなら、根拠もなく罰を受けたと言ってはならない。そうすれば、おまえ自身も同じ罰を受けるだろう。

息子よ、愚か者に油を塗られるより、賢者に打たれたほうがよい。賢者はおまえを打ったとしても、自分が打たれたように感じ、あとでおまえを慰めようとあれこれ考えるだろうが、愚か者は一つまみの油をおまえに塗っ

⁷ アルメニア語版では、この一節は次のようになる。「裁き手の妻と話をしてはならぬ。」

たかわりに、千倍の金を受け取ろうとするからである。

息子よ、私が教えたことを何倍にもして私に返し、おまえの知恵を私の知恵と合わせなさい。」

私、アキルは、これらすべてを自らの甥アナダンに教えました。私、アキルは心のなかで次のように言いました。「私の息子、アナダンが私の教えを守るなら、私は彼を王のまえに目通りさせよう。」私はアナダンが私の言葉に服従しないとは思いませんでした。私は懸命に彼を教え導きましたが、彼が願ったのは私の死だったのです。

アナダンはこのように言いました。「私の父は年老いている。もう死が近い。すでに毫碌している。」そして、アナダンは私の家を情け容赦なく蕩尽しはじめ、私の奴隷や女奴隷たちを打擲し、私の愛しい者たちに私の目の前で傷を負わせ、私の馬や子ロバを情け容赦なく責めさいなみました。

私はアナダンの仕業を見て憤慨し、悲しみに暮れ、自分の財産が惜しくなり、こう言いました。「息子よ、私の財産を蕩尽するな。聖書には、真実がこのように書かれている。自分が働いて得たものでなければ、もったいないと思わない。」

私のこの言葉を聞いて、私の息子アナダンは激怒し、ツァーリの宮廷に出かけました。時を見計らい、アナダンは2通の手紙を書きました。我らが敵、ペルシアの王、その名もアロンにはこのように書きました。

「シナグリブ王の賢者にして宰相、私、アキルは書く。ペルシアの王、アロンに喜びあれ。この書簡がそなたの手に届く日に、自分の軍勢をたくせよ。私はそなたの手にアドルの地を引きわたそう。誰をも打ち負かすことなく、そなたはそれを手に入れることができるだろう。」

もう一通の書簡は、エジプトの王へのものであり、そこにはこう書かれていました。「そなたのもとに私の書簡が届くとき、8月25日、エジプトの野に来る準備をするがよい。私はそなたをナリヴァの町に導きいれ、それを領有させるであろう。」

このとき、王は自らの軍勢をいたるところに派遣しており、まったく一人でその王座にいました。アナダンはこれら書簡をまったく私の筆跡にそっくり書き、私の指輪で印を押し、それらを自分の手元に残し、王に見せる時を見計らっていました。

アナダンはさらにもう一通の書簡を書きました。「シナグリブ王から私の宰相アキルへ。この書簡がそなたのもとに来るとき、自らの兵士と自らの軍司令官たちを集め、軍団を編成するがよい。8月25日にエジプトの野に出陣するように軍勢を整えよ。私が出陣するまでに、戦闘態勢に軍勢を整えるのだ。私のもとにファラオの使者があり、彼らが我らの軍勢を見ることができるようになりたいのだ。」

私の息子アナダンは、二人の若者に書簡をもたせ、私には王がそれをおこなったかのように装いました。私の息子アナダンはツァーリのもとに伺候し、王の面前に、我らに敵対する二人の王への二通の書簡を持ちだし、そして、言いました。

「王よ。永遠にお健やかにお過ごしください。ここにあるのは、わが父アキルの手紙です。私は彼の企みを受けいれることができません。そこで、私は陛下にこの書簡をもってきました。なぜなら、私は陛下により食を得ているからです。私は陛下に悪を企むことができません。私の言葉に耳を傾けてください。」

主人であるツァーリ陛下よ。陛下はアキルを出世させ、自らの貴顕のなかでもっとも高い位につけました。しかるに、アキルは陛下と陛下の王国を陥れるために書簡を認めました。」こういって、王に書簡をわたしました。

これを聞いて王は非常に落胆してこう言いました。「主なる神よ。余はいかなる悪をアキルに働いたというのか。しかるに、かの者はこれほどの悪を余と余の王国にたいして企てようとした。」アナダンは彼に答えて言いました。「わが王よ！彼が讒言されたとしたらどうでしょうか。8月にエジプトの野に行けば、それがほんとうかどうか、わかるでしょう。」

そして、王は私の息子の言葉を聞きいれました。王はエジプトの野に来て、私の息子アナダンが王とともにいました。王が近づくのを見た私は、書かれた書簡のとおり戦闘の日、軍勢を整えました。私は、私の息子のアナダンが私の足もとに穴を掘っているのに気づきませんでした。

王は私が軍勢とともにいるのを見ると、大いなる恐怖に打たれてこう言いました。「アナダンの言ったことは真実だ。」アナダンは答えました。「私の主人である王よ。私の父アキルが何をしたか、陛下は自分の目でご覧になりました。もはや陛下はここからお帰りになるとよろしいでしょう。私がわが父アキルのもとにゆき、彼の邪悪な考えを暴き、軍を解散させ、うまく言いくめてアキル自身を陛下のもとに連れてまいりましょう。そのとき、彼のおこなったことにたいして、彼に裁きを下すがよいでしょう。」

王は帰りました。すると、わが息子アナダンは私のもとに来て、私に接吻し、こう言いました。「健勝にてあれ、父アキルよ。わが王は私をそなたのもとに送り、こうおっしゃいました。『祝福されてあれ、アキルよ、今日この日、そなたは余の意をかなえ、余がそなたに命じたように、わが軍の威容を見せたからだ。そのおかげで、余はファラオの使節のまえで面目をほどした。余自身がそなたのもとに赴こう。』私は言われたとおりに、軍を解散させ、自らの息子アナダンとともに王のもとに行きました。」

王は私を見て言いました。「余の宰相、余の賢者、アキルよ。余はそなたを栄光と名誉のうちに引き上げたのに、そなたは余に戦いを挑んだ。」これを言うと、王は私に書簡をわたしました。私は、書簡が私の筆跡に似せて私の指輪印が刻されているのを見ました。私はこれを読むと、膝ががくがくし、私の舌は縛られたように動きませんでした。私は自分の賢さと呼び覚まそうとしましたが、それを見出すことはできませんでした。なぜなら、非常に強烈な恐怖が私を襲ったからです。

そのとき、私が王に目通りさせた私の息子アナダンは、こう言いました。「年老いた無分別者よ、どうしておまえは王のまえで申し開きをしないのか。いま、おまえの所業にたいしておまえは報いを受けることになる。」また、私の息子アナダンは私にこう言いました。「王はこうのように命じている。おまえの両手を縛り、おまえの足に枷をはめ、そのあと、おまえの頭を胴体から切り離して、10口コチの距離を胴体から離れたあと、それを捨てよ、と。」

私は王の答えを聞き、倒れ伏し、王に跪拝して言いました。「私の主人、王よ。永遠に生きてください。どうしてあなたは、私の言い分を聞かずに、私を殺そうとするのですか。陛下の王国に私が何の罪を犯していないことを、神はご存知です。ですが、もうあなたの裁きは実行されるがよい。ただし、私の家で私を殺すよう命じてください。私の遺骸が埋葬されますように。」

ツァーリは私の身柄を、以前から私と親しかった男に引きわたし、自らの兵士たちを見張りにつけて、私を処刑の場へと連れて行きました。私は前もって私の家に使者を送り、自らの妻にこう言いました。「私を出迎えに出て、まだ男を知らない千人の女奴隷を選び、絹と錦で装いをさせ、私のために泣き歌を泣かせるがよい。なぜなら、私は王から死を賜われることになったからだ。家の子郎党のために宴を催すことを命じ、彼らを私の家に招きいれよ。私が家に着いたら、彼らと食事をし、葡萄酒をたっぷり飲んでから、下された裁きを受けることにしよう。」

私の妻は、私に命じられた通りにしました。私たちが到着すると、私たちを出迎え、ともに自分の家に入りました。食事の準備はできており、私たちは飲み食いをはじめ、すっかり酔っぱらって、眠るために横たわりました。

そのとき、私、アキルは自らの心の底からうめきながら、私を処刑するように命ぜられた自分の友人に言いました。

「天を見つめ、神を畏れよ。私たちが多くの日々友情をもって生きてきたことを思い出してくれ。王、シナグ

リフの父がおまえを斬首するように私に預けたとき、おまえは罪を問われていたが、私はおまえを守り、罪がないことを立証し、王がおまえの無実を信じるまでおまえの命を助けてやったことを思い出してくれ。

いま私はおまえに懇願する。私はおまえに引きわたされたのだから、いま私はおまえに懇願する。私を殺さないでくれ。私を守ってくれ。私はおまえを守ったのだから。私をかわいそうだと思ってくれ。王を恐れなくてくれ。

私の家の監獄には、アラパルという名の男がいる。この男は私に顔が似ていて死刑の宣告を受けている。私から服を脱がせてこの男に着せ、この男を引き出し、私の友人たちに見せ、彼らがこの男に近づいたところで、この者の首を斬り、王がおまえに命じたように、頭を100口コチ引き離すのだ。」

私からこのようなことを聞くと、彼の魂は悲しみでいっぱいになって言いました。

「王の裁きは偉大である。どうして私がこれに背くことができよう。だが、そなたが私に言ったように、そなたの私への愛ゆえに、私はそのようにしよう。なぜなら、こう書かれているからである。『友人が友人を愛するなら、自らの魂をその友人にかけるがよい⁸』そして、私はいまそなたをお守りする。もしも王が私たちを咎めたなら、私はそなたとともに死ぬるであろう。」

この男はこう言うと、私の衣服を脱がせ、その衣服をアラパルに着せかけ、そとに引きだし、自分の友人たちに見せてこう言いました。「見よ、私はこの男の首を切る。」彼らが近づくと、その首をはね、身体から100口コチ引き離しました。彼らはそれが私ではなかったことに気づかず、それが私の首であると考えました。

賢者アキルが刑死したというこの噂は瞬く間に、アドルとナリヴァの全土に広まりました。同時にそのとき、私の友人と私の妻は土のなかに私のために居場所をつくりました。長さ4口コチ、幅4口コチ、深さ4口コチの場所で、彼らは私にパンと水をもってきてくれました。

私の友人は王のもとに伺候し、シナグリフ王に報告しました。「アキルは、陛下のご命令になったとおり、斬首されました。」すべての人々が嘆き悲しむ声が聞こえました。女たちも悲しみに暮れ、こう言いました。「至賢アキル、我が国の賢者が殺された。アキルは実に我々が国の堅固な砦であった。それが、殺人者のように殺された。今後、このような人物を私たちは見つけられないだろう。」

このあと、王は私の息子アナダンのように私に預けたとき、おまえは罪を問われていたが、私はおまえを守り、罪がないことを立証し、王がおまえの無実を信じるまでおまえの命を助けてやったことを思い出してくれ。

⁸ 『ヨハネによる福音書』15章13節「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」のバラフレーズである。

子アナダンは私の家に来たが、悲しみに暮れる様子はなく、私の死を何とも思っていないどころか、楽師だの歌うたいだのを私の家に集め、陽気に盛大な宴を催しました。そして、奴隷たちを殺しました。恐ろしい方法で処刑し、酷い責め苦で苦しめました。それだけでは満足せず、私の妻に自分と寝るように言い寄りました。そして、私アキルは闇と死の淵のなかにあって、私の息子アナダンの私の家でしていることを聞き、自分の心のつらさのなかであえぎ、何をすることもできませんでした。私が見た災難ゆえに私の身体は衰弱しました。

そして、このあと、私の友人は私を訪れました。彼は私のところにもぐりこみ、私のもとに座り、私を慰めはじめました。私はこの友人に言いました。「私のもとから立ち去ったとき、私のために神に祈ってくれ。」

また、私はこのように言いました。「主よ、あなたは聖なる方です。正義であり、真実である方です。いま自らの僕のことを覚え、この監獄から救い出してください。私はあなたに望みをかけているのですから。私が宰相の位にあったとき、肥えた仔牛と仔羊を、主よ、あなたに捧げました。ですが、いま私は死人のように地下に葬られ、あなたの光を見ることができないのです。主なる神よ、いまこそご覧ください。私をこの穴から引き出し、私があなたに捧げる祈りをお聞き届けください。」

エジプトの王、ファラオはアキルが殺されたという話を聞き、大いに喜び祝いました。ファラオはシナグリブ王に書簡を認め、使者を送りました。それには、こう書かれておりました。「エジプトの王、ファラオからアドルとナリヴァの王へ、喜びあれ。余は、天と地のあいだに家を造りたい。余が気に入るように、それを建てすべてを設えるように、余のもとに賢い建築師を送るがよい。余はほかの難題にも答えるように要求する。もしもそなたがそのような賢い建築師を送り、その者が余がそのものに命ずることすべてを成し遂げたなら、余はそなたに3年分の貢税を送るであろう。もしもそなたが余にそのような賢い男を送ることができず、私の問いに答えることができないなら、余にそなたたちの国の3年分の貢税を送るがよい。」

この書簡がシナグリブ王のまえで読み上げられると、自分たちの国の賢者たちが呼び集められ、彼らのまえでファラオから送られた書簡が読み上げられました。王は彼らに言いました。「おまえたちのうちの誰をエジプトのファラオのもとに送り、ファラオによき答えをさせたらよいか。」

彼の国の賢者たちは王に言いました。「王よ、そなたはご自身でご存知です。陛下と陛下の父が統治した時代、そのような問題は至賢のアキルが考えておりました。いまは、万事書籍の知恵をアキルから教えこまれた、その息子アナダンがおります。その者を差し向けるがよいで

しょう。」

これを聞いたアナダンは大きな声を放ちました。「私の主人、王よ。ファラオが要求してきたようなことは、神々のみができることで、どうして人間が能く成し遂げられましょう。」

王はこれを聞き、悲しみに暮れ、自らの黄金の玉座から離れると、ボロにくるまりながら、悲しみははじめました。「おお、若造の言いなりになって、どうして私はおまえを殺したのか、アキルよ。賢さきわまりない我が国の知者よ。余は瞬く間にそなたを殺してしまった。いまや、ファラオに送り出す者として、そなたに匹敵する者を私は見出すことができない。いまやどこにおまえを見出すことができるのか。おお、アキルよ。余は一思いにそなたを殺してしまった。」

私の友人は王のこの言葉を聞いて、倒れ伏し、王に跪拝すると、王にこう言いました。「自らの主人の命令を聞かなかった者は、死罪に問われます。王よ、私は陛下のご命令に背きました。いま、私を殺すようにお命ください。なぜなら、陛下は私にアキルを殺すようにお命じになりましたが、私は彼を匿いました。アキルは生きています。」

彼に答えて王はこう言いました。「言うがよい。言うがよい。余のお気に入りの家臣よ。おまえが真実を言い、生きたアキルを余に差し出すなら、余はそなたに褒美をとらせようぞ。百ケンティナルの黄金と、千の銀と、五巻の錦を取らせよう。」

私の友人は王に答えてこう言いました。「王よ、いまかの者に問われている罪で、かの者を罰しないということをお誓いください。陛下にたいしほかの罪を犯しているなら、そのときはその所業にたいして罰してください。」王は誓いを立て、同時にアキルを呼びに遣いを出し、彼を連れてくるように命じた。

私アキルは王のまえに伺候し、王のまえに倒れ伏しました。私の髪の毛は私の腿のしたに伸び、私の顎髭は私の胸よりもしたに伸びました。私の身体は土のなかですっかり干からびました。私の爪は、鷹の爪のようになりました。王は私を見ると、大泣きに泣きました。王は私のまえで恥じ入りました。というのも、以前は私を敬して遇していたからです。

一時間が経ちました。王は私に答えて言いました。「おお、アキルよ。私が罪を犯したのではない。罪を犯したのは、おまえの息子アナダンだ。かの者がおまえのことを讒言したのだ。」私は答えて王に言いました。「我が主人、王よ。すでに私はそなたのお顔を拝顔しました。私はすでに不服をいだいたことはありません。」王は私に答えて言いました。「今は自分の屋敷に戻るがよい。40日間そこで過ごしてから、私のもとに来るがよい。」

私アキルは自分の家に戻り、40日を過ごしました。

私の身体はすっかり回復し、以前と同じようになりました。私は王のまえに伺候しました。王は私に言いました。「アキルよ、そなたは、エジプトの王がアドルとナリヴァの国に書簡をよこし、それを聞いたすべての人々がこれを恐れて自らの領土から逃げ去ったことを聞いていないか。」私は答えて言いました。「私の主人、王よ！あなたの統治する日々に、私はこうしてまいりました。」

誰かが大きな罪を犯すと、私は陛下のもとに参内し、彼らを改めさせました。人々は私の刑死の報を聞き、人々を庇護する者がいなくなったので、みなは四散してしまったのです。王よ、いまはお命じください。アキルは生きていて王のまえに伺候していると、人々に知らしめてください。私のことを聞いた人々は集まってくるでしょう。ファラオが陛下に書いた手紙については、悲しむことはありません。私が言ってファラオに答えましょう。かの国の3年分の貢税を手にして陛下に献上しましょう。」

王はこれを聞いて喜びに喜んで、自らの国のあらゆる賢者を集め、私に大なる贈り物を下賜し、私を死から救った私の友人を自らの貴顕のなかでもっとも高い位に据えました。

そのとき、私アキルは自らの家に遣いを送り、言いました。「私のために2羽の雌鷹を手に入れ、飼っておくように。わが鷹匠たちにその鷹が高く舞い上がるよう教えるように言いなさい。籠を造りなさい。私の家僕のなかから賢い少年を選び、鷹によって舞いあがるこの檻のなかに入れなさい。鷹には舞いあがるように教え、少年には、『石灰と石を運びなさい。建築師たちは準備ができています』と叫ぶよう覚えさせなさい⁹。そして、紐で檻と鷹の足を結びつけなさい。」

召使たちは自分たちに命ぜられたようにしました。このあとで、アドルとナリヴァの人々は自分の家に帰りました。私は言いました。「王よ、いまこそ私をエジプトの王、ファラオのもとにお送りください。」王が私を送るとき、私は自らの兵を率いていました。私がファラオの国に到着すると、まだ王都につくまえに、私は鷹を連れてくれるように命じました。そして、自分が命じたとおりすべてができることを自分の目で確かめました。王都に入ると、ファラオに遣いをやってこう言いました。

「王ファラオに告げ知らせよ。そなたはシナグリプ王に、『私が問うことには何であろうと、私のすべての言葉に答える男を送れ』と書簡を送った。そのために、シナグリプ王は私を送ったのだ。」王は命じて私が滞在できる場所を示しました。

王は私に目通りを許し、私は王に接吻しました。王は

私に質問しました。「おまえの名は何というのだ。」私は自分の本当の名前を言わずに言った。「私の名はオベカムといいます。私は馬丁の一人です」ファラオは私のこの言葉を聞くと、怒りをあらわにしてこう言いました。「自らの馬丁を余に送りつけてくるとは、余はおまえの王よりも劣るとでもいうのか。余はそなたと語る言葉はない。」王は私を自分の宿屋に返すことに決め、私に言いました。「翌朝来るがよい。そして、私の問いに答えるがよい。もしも私のなぞ解きに答えることができなかったなら、おまえの身体は天の鳥、地の獣の餌食になるだろう。」

王は翌日私に自分のまえに立つよう命じた。自身は自らの黄金の玉座に坐し、真紅の衣装に身をくるみ、その貴顕たちはさまざまな色の衣服を身にまとっていました。私が彼らのまえに立ったとき、王は私に言いました。「オベカムよ、さあ余に言うがよい。余は誰に似ていて、余の貴顕は誰に似ているか。」私は王に答えました。「そなたは太陽に似ており、そなたの貴顕は太陽の光に似ております。」

王は私からこの答えを聞いて、しばしの沈黙のあと、私にこう言いました。「オベカムよ、真にそなたは、そなたを遣わした王の賢者だ。なぜなら、そなたは余の謎を解いたからである。」王はほかの謎解きも私に問うてきました。それは自らを月に、自らの貴顕を星に準えたり、自らを榎の太木に、貴顕たちを花咲く野の花に擬するものでした。そのほか多くの同様の謎を私に課してきましたが、私は謎を解きました。

最後に王は私に言いました。「オベカムよ。余がそなたのツァーリに書いたことだが、余のために空と地のあいだに王宮を建ててくれ。」そのとき、私は遣いをやり、私が仕込んでおいた雌鷹を届けさせました。王は立ち、王とともに人々がいました。私は二羽の鷹を放ちました。鷹とともに少年も舞いあがりました。鷹が舞いあがると、少年は叫び、教えられたとおりに言いました。

「建築師たちの準備はできています。石と石灰をもって来るがよい。」そのとき私は王に言いました。「王よ、石と石灰をもって来るようにお命じください。建築師たちが手間取らないように。」王は答えて言いました。「誰があんな高みまでもちあげることができよう。」私は王に答えて言いました。「私は建築師たちを空へ放ちました。そなたが石と石灰を運ぶことができないなら、それは私たちの負うべき責ではありません。」王は私に何も答えることができませんでした。

「建築師たちは準備万端整えている。石と瓦と粘土を運び上げてくれ」と少年は叫んでいました。彼らは石も

⁹ 鷹によって舞いあがる少年のエピソードは、ロシア語版では非常にあいまいにしか語られていない。ここに現われる少年は、1人のときも2人のときもある。アルメニア語版では、アキルは、話をするのでできない二人の少年を見つけ出し、その少年たちに建設資材を上に乗せよう要請する言葉を発話させるように教えこむ。

瓦も粘土も運び上げることができませんでした。私アキルは鞭をとって打ちはじめました。ファラオの従士たち、貴族たちは逃げ出しました。そして、これを見たファラオは私に怒りを向け、このように言いました。「おまえは魔法を使っている。何の根拠もなく余の臣下たちを打っている。誰が石と粘土をもちあげることができるのか。」

私は王にこう言いました。「私は魔法を使ったわけはありません。あなた様が私にそんな、ありえないことをするようにお頼みになったのです。シナグリブ王がその気になったならば、一日で二つの宮殿を建てることができるでしょう。それは不思議なことでも何でもありません。シナグリブ王は欲したことをおこなうことができるのです。」

ファラオは私に言いました。「宮殿建築の話はやめようではないか。」そして、王は私に言いました。「宿に下がり、朝早くに参内するがよい。」

私が朝早くに参内し、王のまえに伺候すると、王は私に言いました。「アキルよ¹⁰。このような謎をかけさせてくれ。そなたの君主の馬がアドルとナリヴァの国でいなくなると、我が国の雌馬はわが国で仔馬を生む。」

私はこの言葉を聞くと、ただちにファラオのもとを辞去し、自らの僕たちに命じました。「生きたケナガイタチ¹¹を捕まえてきて私にもって来るがよい。」僕たちは行って生きたケナガイタチを私のもとに持ってきました。私は彼らに言いました。「エジプトの国のすべての人が聞くまで、ケナガイタチを打て。」すると、私の僕たちはケナガイタチを打ちはじめました。

人々がこれを聞きつけ、ファラオに知らせました。「アキルは私たちの目の前で発狂しました。私たちの神々を辱め、私たちの奉献台のまえで乱行におよんでいます。」ファラオはこれを聞き、私を自らのもとに呼び出し、私にこう言いました。「どうして、そなたは我らの目の前でそのような所業をおこない、我らの神を辱めるのか。」私はファラオにこのように言いました。

「そなたは世々に生きつづけますように。このケナガイタチはたいへんな悪行をしでかしました。見過ごすことはできません。わがシナグリブ王は私に雄鶏を賜りました。王が私にこの雄鶏を賜りましたのは、それが非常に正確に鳴くことができるからです。私が望む時間にその雄鶏は鳴き、私は目を覚まし、我が君主のまえに伺候します。私はいついかなる時も、遅れたことはありません。昨晚、そなたのケナガイタチはナリヴァとアドルの

地まで駆け抜けて、私の雄鶏の頭を食いちぎり、ここに戻ってきたのです。」

ファラオは私に言いました。「アキルよ、私が見るに、そなたは年老いた。エジプトからアドルまで1080露里もある。どうしてこのケナガイタチたった一晩でかの地に行き、そなたの雄鶏の首を食いちぎり、その夜ふたたび戻ってくることができようか。」

私は彼にこう言いました。「私はこのように聞いております。すなわち、アドルの国で馬がいなくなると、この地では雌馬が仔馬を生む、と。ですが、そなたのおっしゃるとおり、エジプトからアドルまで1080露里もあります。」ファラオは私からこの話を聞くと、肝をつぶしました。

ファラオは私にこのように言いました。「余の謎を解いてみよ。一本の櫓の丸太があった。その丸太のうえに、30の車輪がついた12本の松があった。それぞれの車輪には、2匹ずつねずみがいて、一方は黒く、一方は白い。」私は王にこう言いました。「あなたがお尋ねになったことは、アドルとナリヴァの国では馬丁でも知っています。」

私は言いました。「王は丸太とおっしゃいましたが、それは一年です。丸太にある12本の松とは、一年のなかの12ヶ月です。30の車輪とおっしゃられましたが、それは一か月のなかの30の日です。1匹が白、1匹が黒という2匹のネズミは、昼と夜です。」

ファラオは私にこう言いました。「アキルよ。長さが5口コチ、太さが指くらの砂の縄を二本なえ。」私は言いました。「自らの召使いに、宮殿からそのような縄をもつて来るようお命じください。私はその縄を見本として縄を綯います。」

そして、ファラオが私に言いました。「余はそなたの言い訳を聞かぬ。そのような縄ができなければ、そなたはエジプトの貢税を自分の王のもとにもってゆくことがかなわないのだ。」

そのあと、私アキルは思案に暮れ、ファラオの宮殿に行き、日の当たる側に壁に指一本入るほどの穴を開けました。太陽が昇ると、その光が穴に射しこみました。私アキルは柔らかい砂を一握り掴んでその穴に押しこみました。砂は太陽にあたって縄のようになりました。そして、そのあと私は叫び、ファラオにこう言いました。「自分の僕を遣いに来させ、この縄を綯わせてください。私はそのあいだにもう一本縄を綯います。」

ファラオはこれを見ると、笑って私にこう言いました。

¹⁰ ここでファラオはアキルにたいし、偽りの名オベカムではなく、ほんとうの名アキルと呼びかけている。明言されていないが、すべての謎解きに答えた結果、ファラオは遣いがアキル本人であることを悟ったことを示しているものと考えられる。

¹¹ アルメニア語版では「イタチ」、アラビア語版とシリア語版では、「猫」となっている。エジプトでは猫が神聖な動物として崇拝されてきたことが念頭に置かれている。

「アキルよ、今日私のもとに来るがよい。神の御前でそなたはすべてを取るだろう。余はそなたが生きるのを見て、自らの賢い言葉で我らを導いてくれたのがうれしい。」そのあとファラオは大宴会を催し、私に3年分のエジプトの貢税をくれ、私を丁重に遇し、自らの王シナグリブのもとに返しました。

私は王のもとに到着しました。私が帰ってきたという知らせを聞くと、王は外に出て私を出迎え、大いなる祝祭を催しました。私を自らの貴顕のなかで最高位に据え、私に言いました。「アキルよ。何なりと望むものをあたえよう。余に求めよ。」私は王に言いました。「王よ、陛下におりいっての頼みがあります。私にあたえようとした陛下の財宝は、わが友ナギブナイルにおあたえください。この者のおかげで、私は命永らえたのですから。それから、私にわが息子アナダンをお委ねください。この者は、私が自らの知恵と賢さを教えこんだにもかかわらず、私が見るところ、以前の言葉と以前の知恵をすっかり忘れてしまいました。」

このあと、王は命じてアナダンを私のもとに連れてきました。王は私に言いました。「そなたの甥アナダンはそなたの手のうちにある。この者については、そなたがしたいと欲することをなんでもやってよい。誰もそなたの手からアナダンを奪うことはできない。」

そのあと、私アキルは自らの息子を連れ、自分の家に向いました。私はこの者に9センチナルの鉄の鎖をつけ、その腕に枷をはめ、首に鉄の輪をはめ、その背中に千回、その腹に千回、鞭打ちを加えました。私はこの者を玄関に横たえ、必要最小限のパンと水をあたえ、自らの召使いで名をアナブギルという者に見張らせました。

私はこの男にこう言いました。「私が家を出るときと家に入るときに私がアナダンに言うことを、すべて書き留めさせるがよい。」そのあと、私は自らの息子アナダンに話しはじめました。

「自分の耳で聞こうとしない者は、自分の首でそれを聞くことになる。」そのあと、アナダンは私にこう答えました。「なぜあなたは息子として甥を迎えたのか。」私は言いました。「私はおまえを栄えある座につけたのに、そなたは私を私の座から引きずりおろした。あとになってようやく、私の真実が、おまえの考えついた悪事から私を救った。」

息子よ、そなたは私にとって蛇のようだった。蛇は針を見てそれを噛んだが、針はこの蛇に言った。『おまえは私を噛んだが、私はおまえよりももっと鋭く刺す。』

息子よ、おまえは私にとって、赤い草を食べはじめた山羊のようだった。草は山羊に言った。『なぜおまえは私を食べる？おまえが死んだあと、おまえの皮を何によって赤く染めるのか？』山羊は草に言った。『私がおまえを食うことができるのは、私が生きてるときだけ

だ。私が死んだら、おまえの根を掘ってそれで私の皮を染めるだろう。』

息子よ、おまえは私にとって、天に矢を射る人間のようだった。その矢は天には届かず、神のまえで罪を犯したことになる。

息子よ、おまえは私にとって、友人が凍えているのを見て、冷たい水をもってきてそれを注ぎかける人間のようだった。知るがよい。豚の尻尾が7口コチあろうとも、馬の尻尾と比べることはできない。豚の毛皮が紙よりも柔らかかったとしても、それで貴族の服を誂えることはできない。

息子よ、わたしはおまえに自分の地位を譲り、私の家、家畜、財産を相続させようとしたが、神はおまえの邪悪な考えをお望みにならず、おまえの悪巧みをお許しにならなかった。

息子よ、おまえはかの獐猛な獣に似ている。獣はロバに会ってこのように言った。『おまえは息災にここまでたどり着いたか。』ロバはこの獣に言った。『私の健康は、私がこれ以上おまえに会うことがないように私の前足を堅く縛らなかった者のためにある。』

息子よ、あるとき砂山のうえに毘があった。ウサギがそれに近づき、毘に言った。『おまえはそこで何をしているのだ？』毘はウサギに言った。『神を礼拝しているのだ。』ウサギは毘に言った。『口のなかに何を咥えているのだ？』毘はウサギに言った。『パンのかけらさ。』ウサギは近づいてパンのかけらを取ろうとしたが、毘に足をからめとられてしまった。『パンのかけらがこんなに狡猾なものならば、おまえの祈りを神が受け入れることはけっしてないだろう。』

息子よ、おまえは山にぶつかって角を折ったシカに似ている。

息子よ、おまえは私にとって、金の指輪で溶接された鍋のようだ。その底は黒ずみを免れない。

息子よ、おまえは私にとって、畑に水をやり、その畑に12桁の種をまいた農夫のようだ。農夫は自分の畑に言った。『おまえからもっと多くの収穫を得られなかった。私はまいた分だけ収穫した。』おまえは私にとって暖を取ろうとして暖かい屋敷にもぐりこんだ犬のようだ。暖まると、自分の主人に向って吼えはじめる。

息子よ、おまえは貴族と一緒に蒸し風呂に行ったブタのようだ。ブタは泥たまりを見つけると、そこに寝転んで貴族たちに言った。『みなさんは体を洗いに風呂に行ってください。私はここで泥浴びします。』

息子よ、おまえは『おまえのことを伐りたい』と言われた樹木に似ている。樹木は答えた。『私がおまえの手のなかになかったなら、おまえが私のところに来ることは決してなかっただろうに。』息子よ、おまえは私にとって、巣から地に落ちたひな鳥のようだ。ケナガイタチが

ひな鳥を見つけて言った。『見つけたのが私でなかったなら、おまえはたいへんなことになっていたぞ。』ひな鳥はケナガイタチに言った。『私でなかったなら、おまえは何を食べるのだ?』

息子よ、おまえは私にとって、『盗みをやめよ』と言われたあの盗賊に似ている。盗賊は答えて言った。『私の目が金で、腕が銀だったなら、盗みなどするものか。』

息子よ。私は屠殺のために羊が群れから離され、屠殺のときが来ていないと見るや、自分の子羊の面倒を見るためにふたたびその羊が群れに放たれるのを見た。

息子よ、私は自分の母親を殺す仔馬を見たことがない。

息子よ、私はこの世にあるすべての楽しいものでおまえを養ってきた。ところが、おまえは泥のなかに落ちたパンを食べさせるように、私を扱った。

私はヴィンテージの葡萄酒をおまえに飲ませてやったのに、おまえは枴いっぱいの水も私にあたえなかった。

私はおまえに高価な油を塗ったが、おまえは私の体を土くれのなかで干からびさせた。

私は松を育てるようにおまえを育てたが、おまえは私が骨となって柩のなかに納まることを願った。

息子よ、私はおまえを砦だと考え、心のなかでこう考えていた。『敵が来ても、私はその砦に入り、力を回復するだろう。』しかし、おまえは敵を見ると、私を放りだして敵の手にわたした。

息子よ、おまえは私にとってモグラのようだ。モグラは日のもとに出て、驚が捕まえるだけである。』

そして、我が息子アナダンに私にこのように答えました。「私の主人、アキルさま、もうこれ以上言葉を重ねるにおよびません。私を憐れんでください。人間が神にたいして罪を犯したとしても、神はその人間を赦します。あなたもそのように私を赦してください。私はあなたの馬の後ろでその糞を拾います。あるいは、あなたのブタの群れの番人になります。」

私はアナダンにこう言いました。

「息子よ、おまえはあのヤーヴォルの木¹²のようだ。木は川に覆いかぶさるように生い育ち、その木には実がなるのだが、実は川に落ちてしまう。持ち主がその木のもとに来て言った。『私はおまえを伐ろうと思う。』すると、木は言った。『次の年は私に実がなります。』すると、主人は木に言った。『自分の木の実をつけることができないというのに、ほかの種の木の実をつけることができるのか。』

息子よ、人々は狼に言った。『どうして、おまえは羊の群れのあとを歩いているのか。埃がおまえの目に入るではないか。』狼は人々に言った。『羊の群れの埃は、私

の目の健康によいのだ。』

息子よ、人々は狼の子に読み書きを教えた。『言ってごらん、アー (A)、ベー (B) と。』狼の子は言った。『子羊、子ヤギ。』

息子よ、おまえは、私が教えたのとは正反対のことを私に企てた。神はそのような人間には容赦しない。善をおこなう人間には、善いことが起こるだろう。私は真実を貫いた。神はおまえの悪行によっておまえを滅ぼそうとされている。ロバの頭を銀の皿に載せたが、したに落ちこちて埃まみれになった。人々はロバの頭に言った。『自分の頭が善いことをしようとしなかったがために、それは名誉ある場所から落ちこちて埃まみれになった。』

息子よ、例え話に言われているとおり、『生んだものは息子と呼ぶが、金で買った者は奴隷と呼ばれる。』私を復活させた神が、我らのあいだに裁きを下すであろう。」

このとき、アナダンは浮き袋のように膨れ上がったかと思うと、真っ二つに割れてしまいました。

善をする者には善いことが起こり、他人の足もとに穴を掘る者は、自身がその穴に落ちるのです。

刊本：

Библиотека литературы Древней Руси. Т.3., СПб., 1999. С.28-57, 362-364.

(2) エリフェリイの12の金曜日についての物語

〈解説〉

『12の金曜日についての物語』は、おそらくは「正しい信仰」をめぐるユダヤ人との論争が差し迫ったものであったキリスト教黎明期にできたアポクリファである。テキストはロシアにギリシア語からの翻訳というかたちで、まずまちがいなく南スラヴ語を媒介して入ってきた。もっとも時代の古いスラヴ語写本の一つ（それがもっとも古いものではなかったとしても）は、セルビアの写本であると考えられる。この写本は14世紀初めのものと比定されるベオグラード図書館写本200番で、1872年にС.Н.Ваваровичによって公刊された。そのほか、15世紀から19世紀にいたる複数の写本が、『12の金曜日の物語についての講話』、『12の金曜日の発見』などさまざまな題目のもとでこの物語を収めている。

このテキストの研究の歴史はС.Шефченкоによって述べられている（『キエフ聖ウラジーミル大学雑誌』2巻、キエフ、1908年）が、本格的なテキスト学研究はいままでに現われていない。しかしながら、少なくとも、スラヴ・ロシアの伝統で少なくとも2つの異なる編纂本

¹² 中世ロシア語でいうヤーヴォルは、プラタナス、ポプラ、カエデと同じカエデ科の樹木だが、木の実はつけない。ロシア語版のテキストは歪曲されている。アルメニア語版では、フェニックス棕櫚と述べられており、この木が持ち主に、実が水のなかに落ちないように自分をほかの場所に移してくれるように頼んでいる。

の系統があったということができる。

A.H.ヴェセロフスキイは、いわゆる「エレフテリイ」編纂本と「クリメント」編纂本があったと述べている(『キリスト教伝説発展の歴史についての試論』ЖМНП, №6, 1876)。前者の名前の由来は、ユダヤ人哲学者タラシイと教義にかんする論争をするキリスト教神学者の名前にあり、後者の名前の由来は、このテキストがローマ教皇クリメントが書いたものであると作のなかで述べられていることによる。後者は、さらにA系統、B系統に分かれる。エレフテリイ編纂本は、スラヴ・ロシアの写本のみによって知られ、クリメント編纂本は、スラヴ、西欧の写本のなかで見出される。

『12の金曜日の物語』は複雑な歴史を経験してきており、そのことは刊本となった写本テキストやそのほかの写本テキストに脱落や不分明な箇所が多く存在することからもわかる。テキストそのもののわかりにくさが、翻訳や注釈を難しくしているのはいうまでもない。中世ロシアの『物語』の一連の写本は15世紀から16世紀のもので、基本的にそれらはエリフエリイ編纂本である。そのなかの一部には、ユダヤの哲学者とキリスト教の哲学者との論争が「問い＝謎かけ」と「答え＝謎解き」のかたちで述べられており、それは旧約聖書の諸事件をキリスト教的に解釈したものになっている。この論争が短く短縮されている版もある。

諸写本はテキストの個々の断片の構成と、12の金曜日についての物語の順序によっても異なっている。12の金曜日についての語りは、ユダヤ人のマルフが古来の誓約を破ってキリスト教徒エリフエリイに伝え、その結果、マルフは父に殺されることとなったわけだが、この筋自体が『物語』のなかで一つの独立した主題となっている。

12の金曜日についての物語はしばしば、とりわけ17世紀から19世紀にかけて、独立した作品として書き移されている。その基盤のうえに、おそらく12の金曜日についての民衆巡礼霊歌 *духовный стих* が成立し、それはいくつかの異本で知られている。

金曜日は、イエス・キリストが磔刑された日として、キリスト教の黎明期から崇敬されてきたことはよく知られている。このことについては、4世紀中葉のキリスト教会史家カエサリアのエウセビオスが『コンスタティノス大帝伝』のなかで述べている。後代になって、正教キリスト教徒にとって崇敬されるべき日は、水曜日と月曜日になった。

ビザンツの『師父パホーミイの水曜日と金曜日につい

ての幻視の講話』は、スラヴ・ロシアの翻訳において知られていたが、水曜日と金曜日は二人の天使の姿で、生きているあいだに斎戒を厳格に守った人間を天国に見送っている。15世紀のある文集では、この『講話』が『12の金曜日の講話』のテキストのすぐあとに収められている。このことは、筆写をおこなった写字生が二つの作品を同じ主題を構成する一つの全体として捉えていたこと、キリスト教黎明期のアポクリファで触れられた問題が、ルーシで喫緊の問題でありつづけていたことを示している。

民衆キリスト教の伝統においては、金曜日は厳格に斎戒を守る日としてだけでなく、聖なる殉教者パラスケヴァ(「パラスケヴァ」という単語は、ギリシア語で「金曜日」を意味する)の崇敬と結びついている。

民俗学の資料によると、聖パラスケヴァ＝ピャトニツァは基本的に女性の守護者で、結婚、出産、家事、とりわけ、糸紡ぎ、機織りの守り手であった。糸紡ぎ、機織りは金曜日にはおこなってはならなかった。民衆の慣習によって、金曜日を「守る」ことが義務とされていたのである。12の金曜日についての『物語』の人気は、こうしたことから説明される。

一連の写本から判断されるとおり、この『物語』においては、金曜日に斎戒を守ることは、魂の安寧ばかりではなく、人間をさまざまな災厄、突然の災難、不慮の死、敵、溺死、熱病、そのほかからも守護することに寄与すると捉えられていた。『12の金曜日の物語』においては、民衆キリスト教のさまざまな考えが反映されている。

この『物語』はロシア国民図書館РНБの15世紀の写本、ソフィア写本集成1264番にもとづいて刊行されている。この写本は、H.C.チホヌラーヴォフによって『ロシアの禁制文学の作品集 Памятники отреченной русской литературы』2巻、323-327頁(モスクワ、1863年)で刊行された。写字生の明らかな間違い、テキストの欠損の修正は、『物語』のほかの写本、ノヴァコヴィチによるセルビア写本(14世紀)、H.C.チホヌラーヴォフによる歴史博物館の宗務院集成830番(16世紀)、グリゴロヴィチによるセルビア写本(15世紀)、刊行されていないストックホルム王立図書館写本A797(16世紀)によって行われている。

〈翻訳〉

西のほうにラウラという国があって、そこにシャプタイル¹³という大きな町があり、たくさんのユダヤ人が住

¹³ 『物語』のほかの写本では、「ヴィピタン」、「ヴォスピタル」となっている。これらの町の名前をどこかの具体的な地名と結びつけることは成功していない。中世ロシアの写本で別の名前となった、「内陸シリア」をあらわすメソポタミアの地名「セプタイム」、「セプタイル」の残響であった可能性はある。エウフラテス川の東岸にあったアッシリアの町、セパルヴァイム(シフォラ)であった可能性も排除できない。ルウラ(ラヴラ)の国の名称については、『物語』のほかの写本にも現われている。

んでいた。彼らは市場でも、通りでも、市門でもキリスト教徒と諍いをした。そして、彼らはコリオン帝¹⁴の治世に、たがいに殺し合いをした。ユダヤ人たちは集まってキリスト教徒たちに言った。

「いつまで我々と我々の子孫たちは諍いをつづけるのか。そなたたちは自らの男で賢い哲学者である者を選ぶがよい。我らは神の言葉を理解しているほかの賢者を選ぶであろう。我らは彼らの話を聞こうではないか。もしもおまえたちの哲学者が論争に勝ったなら、私たちはこぞってキリスト教に改宗しよう。もしも我らの誰かが洗礼を受けようとしなかったなら、その者は我らから大いなる災難をこうむるであろう。一方で、我らの哲学者がおまえたちの哲学者を言い負かしたならば、おまえたちが我らの信仰に入るのだ。」

彼らは、神を畏れる男、その名はエリフェリイを選んだ。一方、ユダヤ人たちは自らの哲学者、その名もタラシイを選んだ。彼らは一堂に聖堂に会して論争がはじまった。論争は長い時間つづけられたが、帰ろうとする人々は誰もいなかった。そのユダヤ人が息子をともなってきた。このとき、彼らは深遠な会話をはじめた¹⁵。

おお主よ、すべてを見そなわす方よ、エリフェリイを助けたまえ。ユダヤ人に論争で勝てますように。かのユダヤ人は憤怒し、憤激と怒りでいっぱいになり、憤怒に満ちた心とかつと見開いた目で、かのキリスト教徒に言った。

「おまえが私を論争で打ち負かしたことを、私は知っている。おまえたちの信仰は真実であり、私たちの信仰は真実ではない。シナイ山ではモーセに幻視が現われた¹⁶が、おまえたちには真理は処女マリヤをとおして啓示された。真理は、我らの預言者たちが予言し、おまえたちの使徒たちが指で指し示した方、奴隷の姿を取り人々とともにおられた方についてのものである。

そのユダヤ人はこう言う、キリスト教徒に向って言った。「私は、おまえが賢い男であることがわかっている。だが、おまえは12の金曜日について知らないのではないか。それはおまえたちの魂のためになる話だ。」

彼はこういうと、外に出て悲しみのために立ち尽くした。

しかし、マルフという名の彼の息子が残った。かのキリスト教徒はこの息子に言った。「おまえは、おまえの父親が言っていた12の金曜日の話を知っているか。」彼は答えた。「知っています。私たちの祖先が、そなたたちの使徒たちの一人であるキリスト教徒を捕えたのですが、そのキリスト教徒から巻物を奪いました。その巻物には12の金曜日について書かれていたのです。このキリスト教徒は酷いやり方で殺され、巻物は一通り読み終えたあとに火にくべられました。我らのあいだではいまにいたるまで掟があり、その内容についてキリスト教徒に知らせてはいけないうことになっているのです。ですが、私はそなたたちの信仰が素晴らしいものであることを知り、私の魂はそれに餓えております。」そして、マルフはこの物語をはじめから最後まですべて語りはじめた。

すると、そのユダヤ人がキリスト教徒のもとに来て息子に言った。「おまえは12の金曜日について惑わされたのか。」だが、息子は自らの口を開き、かのキリスト教徒にすべてを語った。そして、かのユダヤ人はエリフェリイに言った。「これはキリスト教徒に知られないようにしなければならぬのに、私はどうしてそれを教える権限があたえられたというのか。それなのに、私の息子がおまえにこれを語ってしまったのだ。」彼はナイフを抜き、自分の息子に突き差し、そのあと自分で自分に刃を向けた。

兄弟よ、私はこのユダヤ人から話を聞き、自らの胸のうちに秘めておくことをせず、すべてのキリスト教徒たちに向けて書く。

第1の金曜日は3月6日である。この日、アダムが神の戒めを破り、天国から追放された。

第2の金曜日は、受胎告知の祝日¹⁷まえの金曜日である。この日、カインが嫉妬ゆえにその弟アベルを殺した。アベルは地上で最初の死者となった。

第3の金曜日は、受難週の金曜日である。我らが神キリストは、惑う者たちを探し求める¹⁸という誓いのとおり、その日の昼の9の刻にキリストは十字架につけられた。

¹⁴ 759年から764年にかけてローマ帝国のシリア統治者であったクヴィリニウスを指すと考えられる。この者のもとで、人口調査が行われた。

¹⁵ この一節は意味がよくわからない。ほかの写本では、「この論争のなかで彼らは深い意味をもつ書物にあたった」となっている。この一節は次のように理解すべきである。すなわち、二人の論争者は自分たちの正当性を証明するために、賢者たちによる意味の「深い」権威となる書物を参照したのである。ロシアの民衆宗教詩「鳩の書」が参考となる。

¹⁶ 旧約聖書『出エジプト記』では、モーセがエジプトで虜囚にされていたユダヤ民族を約束の地へと導くとき、シナイ山上で神が雷鳴と炎と稲妻が輝くなかでモーセのまえに姿をあらわしたことが詳しく語られている。神は、ユダヤ教の根本の掟となる十戒をモーセに授けた。

¹⁷ 大天使ガブリエルが処女マリヤのまえに現われ、イエス・キリストがマリヤから生まれるというめでたき知らせをもたらした記念日は、教会暦では3月25日（グレゴリオ暦4月7日）にあたる。

¹⁸ キリストを信じないか、信仰が揺らぐ人々を「迷える羊」のイメージに喩えることは、『ペトロの手紙 一』2章25節、『ヨハネによる福音書』10章1-17節参照。

第4の金曜日は、キリスト昇天祭¹⁹まへの金曜日である。この日、ソドムとゴモラとそのほか三つの都市が一日で灰燼に帰した。

第5の金曜日は、聖霊降臨祭²⁰まへの金曜日である。この日、ハガルリヤネ²¹が多くの国を征服し、住民をクレタ島に追い払った。彼らは、ラクダの肉を食べ、ヤギの血を飲み、この島で淫蕩のかざりをつくした。

第6の金曜日は、ミヤソプスト（肉断ち）²²まへの金曜日である。この日、2の刻、預言者エレミアの時代に、エルサレムはバビロニア人たちによって征服された。

これは大いなる虜囚であった。エルサレムは73年間人もなく放置された。そのとき、イスラエルの民はバビロンの川辺で泣き暮らし、自らの楽器を鳴らした。そのとき、虜囚となった彼らに「私たちにイスラエルの子たちのシオンの歌を歌ってほしい」と、たって願うものがあった。彼らは言った。「我らは歌を歌いますまい。故郷の地に戻ることができてからふたたび歌うことにしよう。」

このゆえに、ラテン人は我々のミヤソプストまへの日曜日と偉大なる土曜日のまへの「父と息子に誉れを」ではなく、「ハレルヤ」を歌うのである。そのあいだの日数は73日である。第6の金曜日が7月の2週目にあたることもあり、それは年によって変わる。

第7の金曜日は、ペテロの日²³のまへの金曜日である。この日、主はエジプトの国にモーセとアロンの手によって10の罰を送り、昼の5の刻に彼らの川を血に変えた²⁴。

第8の金曜日は、聖なる神の御母の就寝の日²⁵のまへの金曜日である。この日、羽を生やしたイシュマエルの

子孫²⁶が海を征服し、偉大なるローマとその西にある多くの人々と国々を73年間虜としたが、神のご命令により地の表にちりぢりになった。

第9の金曜日は、洗礼者ヨハネの斬首の記念日²⁷まへの金曜日である。この日、昼の10の刻にヘロデは洗礼者を殺した。

第10の金曜日は、十字架挙栄祭²⁸まへの金曜日である。この日、昼の1の刻にモーセが杖で海を割って道をつくり、イスラエルの民を通し、敵は海に沈んだ。この金曜日は移動することがある。

第11番目の金曜日は、使徒アンドレイの日²⁹のまへの金曜日である。この日は預言者エレミアの聖像入れによって特別の日となる。この聖像入れは、この日昼の9の刻に、天使によって門から外され、二つの山からなる二つの柱のあいだに据えられた。それはキリストの再臨まで炎の雲につつまれている。

第12の金曜日は、キリスト生誕祭のまへの金曜日である。この日、ヘロデが赤子を殺した。この金曜日は移動することがある。

これら12の金曜日は、斎戒と祈りと祈禱歌によって守られるべきであり、その日はパンと水以外口にしてはならない。もしもできるならば、喜捨をするがよい。肉欲は控えなければならない。もしも懐胎したなら、生まれた子は盲か、跛か、そのほかの差し障りによって、健やかに育たぬであろう。清浄のうちに守れ。主が自らの王国でそなたたちをお守りくださるであろう。兄弟たちよ、あとうかぎり我らの罪が赦されるばかりではなく、イエス・キリストによって天の王国を受けることができ

¹⁹ 主の昇天祭は、復活祭後40日目の木曜日にあたる移動祝祭日である。この祝日は新約聖書『ルカによる福音書』24章50-53節、『使徒言行録』1章9-12節のエピソードと結びついている。キリストは復活したあとも40日間地上に留まり、そのあと、弟子のまゝに姿をあらわして彼らを祝福し、昇天した。この事件の記憶は、4世紀から5世紀にかけてキリスト教徒によって祝われるようになった。正教会の12大祭の一つである。
中世ロシア（15世紀終わり以前）では、新年は3月にはじまった。ここにあげられる金曜日は、おおむね暦の進行にしたがっている。

²⁰ 復活祭後の50日目。

²¹ ハガルの子孫の意。中世ロシアでは、ふつうアラブ人を指した。旧約聖書『創世記』のエピソードによる。ユダヤ人の祖とされるアブラハムは、正妻サラとのあいだに子ができなかったため、サラの勧めで妾ハガルを娶る。そのあいだにできた子がイシュマエルで、その子孫がアラブ人になったと考えられた。注26のизмаильянеは「イシュマエルの子孫」の意味でやはりアラブ人を指す。

²² 冬を送り、春を迎えるロシアの祭、マースレニツァの別名。西欧の謝肉祭にあたる。

²³ ペテロとパウロの祝日は、6月29日（グレゴリウス暦7月12日）に祝われる。

²⁴ 『出エジプト記』7章19-22節参照。ファラオにユダヤ人を虜囚から解放させるために神がエジプトの国に送った最初の罰がこれであった。神の命令に従い、モーセとその兄アロンは、杖の一撃でナイル川を血に変えた。

²⁵ 8月15日（グレゴリウス暦8月28日）。

²⁶ 中世ロシアでは、アラブ人を指す。

²⁷ 8月29日（グレゴリウス暦9月11日）。

²⁸ 9月14日（グレゴリウス暦9月27日）。コンスタンティノス大帝の母、聖太后ヘレナが、エルサレムでイエス・キリストが架けられた十字架を発見したことを記念する祭事で、12大祭の一つ。

²⁹ 11月30日（グレゴリウス暦12月13日）。

ますように。

刊本：

Библиотека литературы Древней Руси. Т.3. СПб., 1999. С.242-247,392-395

(3) メルキセデクについての物語

〈解説〉

ニルの息子、メルキセデクにかんする物語は、聖書にはない。メルキセデクは旧約聖書の登場人物で、使徒パウロがヘブライ人に宛てた書簡(『ヘブライ人への手紙』)のなかでわずかに非常に秘密めかして言及されているだけである。メルキセデクは「いと高き神の祭司」であり、アブラムがケドルラオメルとその味方の王をうち破って帰ったとき、アブラムを出迎え、パンと葡萄酒をもってきて彼を祝福した。アブラムはすべての物の十分の一を彼に贈った。³⁰

メルキセデクという語は、「私の正しい王」³¹、「サレム(シャーレーム)」、すなわち、「平安」の王という意味であり、「彼には父もなく、母もなく、系図もなく、また、生涯のはじめもなく、命の終わりもなく、神の子に似た者であって、永遠に祭司」である。³²

聖書のほかの箇所(『ヘブライ人への手紙』5章7,11,15,17,21節)では、メルキセデクが占める大祭司という位の系譜に話がおよぶときにこの名前が想起される。И.Я.Порфирьевによれば、この神秘めいた性格が、メルキセデクにかんするさまざまなアポクリファ物語が創造される余地を生んでいる。シリア人エフREMとそのほかの中世ロシアの作家たちは、メルキセデクをノアの子、セムと同一視するか、もしくは、この人物のなかに天使を見た。Порфирьев И. Апокрифические сказания о ветхозаветных лицах и событиях. Казань, 1872. С115-120.

アポクリファは、メルキセデクについてのより詳細な、よりしっかりと動機づけられた物語をもたらしてくれるが、にもかかわらず、メルキセデクの聖書における位置づけにしたがいつつ、それらを不可欠な要因として物語のなかに取り込んでいる。Яцимирский А.И. Библиографический обзор апокрифов в южнославянской и русской письменности. Пг., 1921. С.100-111.

中世ロシアの文献のなかでもっとも頻繁に出会うメルキセデクについての物語は、アレクサンドリアのアタナシオスによって書かれたとされるものである。15世紀

から16世紀のプロログ(教会暦)では、5月22日がメルキセデクの日とされている。

この物語においてメルキセデクはギリシアの王、メルキルの息子で、その父はメルキセデクが至高の三位一体を信じて疑わなかったために、彼を神々への生贄にしようとした。ところが、メルキセデクの祈りによって、大地が裂けて人間を生贄にしようとした異教徒たちを飲みこんだ。この地上にメルキセデクの子孫が残らなかったのも、神の御言葉に拠り「子孫のない君」と呼ばれるようになった。

メルキセデクは7年間タボル山に隠れ、木の葉と露で命をつないだ。そこを、アブラハムが彼を見つけ、衣服をもって行き、彼の髪と爪を切ってやり、メルキセデクから祝福を受けた。

この話は、ロシアの巡礼者、修道院長ダニールが12世紀に、タボル山でメルキセデクの洞窟に案内されたとき、案内人から聞いて書き留めたものである。また、別の物語によれば、メルキセデクはノアの息子、ハムの膝から生まれ、神に好まれたので、ハムはヨルダンの国に彼を連れてゆき、聖職者とした。メルキセデクがアブラハムと出会ったとき、メルキセデクはアブラハムをパンとクワスで祝福した。

ここで取り上げるニルの妻、メルキセデクの母、ソフロニマについての物語は、中世ロシアの写本のなかではあまり見かけないものである。この話の時代設定は、世界を襲った大洪水の前夜である。ニルはノアの兄弟とされているが、メルキセデクはまだ子供であるが、その将来の役割は神と大天使ガブリエルの預言からわかる。ノアはよく知られた旧約聖書の登場人物だとしても、その兄弟ニルや、ニルの妻ソフロニマについて聖書に言及はない。聖書のメルキセデクとアポクリファの赤ん坊となつなぐものは、聖職者の長となるというその将来の使命しかない。

このアポクリファのテキストはいくつかの写本において知られている。最古のテキストは、15世紀のバルソフのパレヤ(旧約聖書抜粋、国立歴史博物館バルソフ集成№619, л. 2)のものである。しかしながら、バルソフのパレヤは、物語の最終部分を残すのみである。それ以外の写本は年代順に、ロシア科学アカデミー図書館45.13.4(6世紀)л.365-366об.、ロシア国民図書館(サンクト・ペテルブルグ)キリル・ペロゼルスキ修道院集成№27/1104(17世紀)л.232об.-238об.(K-B)、ロシア国立図書館(モスクワ)三位一体セルギイ大修道院集成№793(1639年)л.401-402(TCJ)である。

³⁰ 『創世記』14章。

³¹ 『詩篇』100篇4節。

³² 『ヘブライ人への手紙』7章。

歴史博物館、アカデミー図書館、国民図書館写本のなかにこの作品の拡大版が、国立図書館写本のなかに短縮版が収められている。国民図書館写本と国立図書館写本は、1863年にチホヌラーヴォフによって刊行されている。この翻訳の底本となったテキストは、アカデミー図書館写本のもので、校訂はM.Д.カガン＝アルコフスカヤが、解説、現代ロシア語訳、注はP.Б.タルコフスキイがおこなった。

〈翻訳〉

ニルの妻、ソフロニマは子を産めない体質で、ニルのために後継者を生むことができなかった。

かくのごとくソフロニマは年をとり、彼女の死が近づいてきたが、そのとき、彼女は腹のなかに子を孕んだことを感じた。ニルは主が自らを衆目のなかで祭司と定めてから、彼女と交わりをもつことはなかった。ソフロニマは恐れ畏み、毎日ずっと人目を忍んで暮らした。

出産の日となった。ニルは自らの妻のことを思いだし、彼女と話すために彼女を自らの部屋に呼び出した。ソフロニマが腹に子を宿して夫のもとにゆくと、お産がはじまった。ニルは彼女を見、このような破廉恥なことが起こったことをたいへん羞じ、彼女に言った。「妻よ、どうしておまえはこんなことをやらしたのか。衆目のなかでおまえは私に恥をかかせたのか。さあ今は私から離れよ。お前の腹が恥辱を身ごもった場所にゆけ。私が自らの手を辱めないように。神のまえで私が罪を犯さないように。」

すると、ソフロニマは自らの夫に答えて言った。「私のご主人様、私はもう年老いています。私には若さの力はありません。私の謙抑な腹がどのように懐胎したのか、私はわからないのです。ニルは彼女の言ったことを信じなかった。ニルは彼女にふたたび言った。「私から去れ。さもなければ、いまこの時おまえを殺す。私は神のまえで罪を犯すことになるだろう。」

ニルは自らの妻にこのように言うのと、ソフロニマはニルの足もとに倒れて死んだ。ニルは深くこれを悲しみ、自分の心のなかで次のように決断した。「私の主によって彼女にこのように裁きが下った以上、主はいまも慈悲深く悠久である。なぜなら、主は私に妻に手を上げさせなかったからである。そのとき、ニルのまえに大天使ガブリル³³が現われて言った。「おまえの妻ソフロニマが

罰を受けて死んだと思っはならない。彼女が孕んだ嬰兒は、正しい胤であり、おまえが神の賜物の父親とならないように、私は嬰兒を天国³⁴に受け入れるだろう。」

ニルは一刻の猶予もなく、自らの部屋の扉をいくつも開け放ち、自分の兄のノア³⁵のところに急ぎ、彼は彼の妻ソフロニマに何が起こったかを、ノアに話して聞かせた。ノアは自分の弟の家に急ぎ、自らの弟の妻が死んでいるのを見たが、彼女の腹は出産しようとしていた。

すると、ノアはニルに言った。「悲しんではいけない、わが弟ニルよ。なぜなら、主は今日私たちの恥辱を隠してくださったからである。このことは、まだ誰も知らない。今は彼女を埋葬することに骨を折ろう。主は私たちの恥を隠して下さろう。」彼らはソフロニマを寝台に置き、黒い覆いをかけ、扉を閉めた。そして、ひそかに墓穴を掘った。

しかし、彼女のために墓の準備ができると、死んだソフロニマから赤ん坊が生まれ、死んだ母親の横たわる寝床にいた。そして、ノアとニルはソフロニマを葬るために部屋に戻ってきたが、そのとき、死んだ母親の衣服をまとい、かたわらに座っている嬰兒を見た。ノアとニルはびっくり仰天した。なぜなら、赤ん坊はたいへんかわいらしくすでにしゃべることができ、自分の唇で主を讃えていたからである。

ノアはニルとともに驚きの念をもって赤ん坊を見ていたが、こう言った。「わが弟よ、これは神の仕業だ。彼の胸には、聖なる聖職者の徴がある。その姿は栄えあるものだ。」ノアはニルに言った。「弟よ、これは主が私たちを継ぐ聖職者の血を新しくしたのだ。」もはやニルとノアは一刻の猶予もなく、赤ん坊に湯浴みをさせ、聖職者の服を着せ、嬰兒に祝福のパンを食べさせた。そして、この赤ん坊にメルキゼデク³⁶という名を付けたのだった。

ノアとニルはソフロニマの身体に向い、彼女から黒い覆いをとり、彼女の身体を湯灌し、明るい華やかな色の服を着せ、彼女のために柩を用意した。ノアとニルはメルキゼデクとともに尊厳をたもち衆人環視のなかで彼女を埋葬した。

そして、ノアは自らの弟に言った。「この赤ん坊をそのときまで大切に隠しておくがよい。なぜなら、私たちについて全国の人間が噂をして、もしことが明らかになったら、この赤ん坊を殺そうとするであろうから。」

ニルの時代に、国中であらゆる下剋上の騒乱が巻き起

³³ 大天使ガヴリエルのこと。ガヴリエルは、ヘブライ語で「神の男」の意。旧約聖書でも新約聖書でも、知らせをもたらす、幻視を解釈する存在である。メルキゼデクにかんするアポクリファの場合と同じように、その父ザハリヤに洗礼者ヨハネの誕生を知らせ、聖母マリヤにイエスの生誕を知らせ、預言者ダニールにその幻視の意味を解く。

³⁴ 神によって東方に設けられたというエデンの園を指すと考えられる。

³⁵ 聖書の登場人物。レメクの子、メトシェラの孫、セム、ハム、ヤベテの父。義人ノアとその家族は方舟で洪水から救われた（『創世記』5, 6章）。

³⁶ ヘブライ語で「正しい王」の意。

こった。ニルはひどく悲しんだが、何よりも心配の種だったのは、赤ん坊のことであった。ニルは考えた。「この赤ん坊をどうしたらいいのだろう。」ニルは自らの腕を天に差しのばし、神に呼びかけ、こう叫んだ。

「何ということですか。永遠の主よ。私が生きるこの日々、あらゆる無法が地上に満ちあふれています。私たちの終わりが近いことが、私にはわかります。主よ、いまこの赤ん坊が生まれたということは、何を意味するのでしょうか。彼にはどのような定めがあるのでしょうか。そして、この赤ん坊が滅亡に臨んで恐怖のあまり私たちとともに震えおののかないようにするために、私はこの嬰兒のために何をしたらよいのでしょうか。」

主はニルの言葉を聞き届け、夜の幻視のなかで現われ、彼に言った。「ニルよ、それは大いなる滅亡の時がこの地上に来てしまったということなのだ。もうこれ以上、私はこの侮辱に耐えることはできない、私はじきに地に大いなる滅亡を送り下そうと思っている。ニルよ、赤ん坊のことは心配せぬがいい。なぜなら、私はそのまえに自らの大天使ガブリエルを遣わすだろう。ガブリエルは嬰兒を受け取り、エデンの園に隠すであろう。嬰兒は、滅ぶ運命にある者たちとともに滅びはしないであろう。そして、今このとき、私はこの嬰兒を指し示す。この嬰兒は永遠にとこしなえに私において祭司のなかの祭司、メルキゼデクとなるであろう。そして、私は彼をわが民のなかの偉大なる人間とするであろう。」

そして、ニルは自らの夢から覚めて起き上がり、彼に現われた主を讃えて言った。「私たちの祖父の神、主は讃えられる。私の父祖たちの祭司職にある私の祭司職への侮辱を主は赦そうとなさらなかった。なぜなら、その御言葉は、わが妻、ソフロニマの寝台で大いなる祭司をお創りになったからである。なぜなら、私には子孫がなかったからである。この子どもは私の子孫として私の後継者となり、私の息子となるだろう。そなたは、セト³⁷、エノフ³⁸、ルシイ、ミラム、レルフ、アルサム、ナイル³⁹、エノク⁴⁰、メフアイル、そしてそなたの僕ニルとともに、メルキゼデクを自らの僕とされたからである。しかし、メルキゼデクはもはや別の種族の祭司の長となるだろう。なぜなら、この種族は内争と動乱のなかで自らを破滅させ、最後の一人にいたるまで死ぬであろうから。私の兄、ノアだけが助かって、ほかの種族の根として植えられ、ノアの子孫からふたたび地上に人々は増えるであろうから。メルキゼデクは、そなたが唯一の神であることを認

め、そなたを信じる諸民族の祭司の長となるだろう。⁴¹」

そして、このとおりのことが起こった。この子どもはニルの保護のもとで40日を過ごすと、主は大天使ガブリエルに言った。「地上の祭司ニルのもとに降り、子どものメルキゼデクを連れ、安全のためにエデンの園に隠すがい。なぜなら、すでに時は近づいているからである。私はすべての水を地に浴びせかけ、地上にいるすべてを滅ぼすであろう。そして、私はあらたな民を立てる。メルキゼデクは、この民において祭司の長となるであろう。」

ガブリエルは急いで夜に、自らの寝台で寝ているニルのもとに降りた。ガブリエルはニルのもとに現われて言った。「主はこのようにニルに仰せである。私がおまえに託した子どもを私に引きわたすがよい。」しかし、ニルは自分に告げる者が誰かわからず、彼の心は動揺した。「もしもこの子どものことを人々が知ったら、子どもを取り上げて殺してしまうであろう。なぜなら、人々の心は主を前にしても狡猾だからだ。」そして、ガブリエルに答えて言った。「私には子供がおりません。私に向っておっしゃっている方が誰かわかりません。」ガブリエルは彼に答えた。「恐れることはない。ニルよ。それは私だ。大天使ガブリエルだ。主が私をお遣わしになった。私は今このとき、そなたの子どもを連れて、子どもとともに立ち去る。そして、子どもをエデンの園に隠す。」

すると、ニルは以前に見た夢を思い出して、この言葉を信じてガブリエルに答えた。「今日そなたを私に送られた主は讃えられる。いまそなたの僕ニルを祝福したまえ。子どもを連れて行くがよい。この子どもに、そなたに命ぜられたとおりのことをするがよい。」ガブリエルはその夜、子どものメルキゼデクを連れ、自分の翼に載せてエデンの園に連れていった。

ニルは翌朝起きると、隠し部屋に行ってみたが、子どもの姿は見当たらなかった。ニルは喜びとともに深い悲しみを感じた。なぜというに、その子供は彼にとって息子の代わりだったからである。

我らが神につねに誉れがありますように。今もとこしなえに永遠に。アーメン。

刊本：

Библиотека литературы Древней Руси. Т.3., СПб., 1999. С.114-119, 374-377.

³⁷ カインによるアベル殺害ののちに生まれた、アダムとエヴァの子。

³⁸ セトの子、エノス（『創世記』5, 6, 7, 9章）を指すと考えられる。

³⁹ この5人については、聖書には現れない。

⁴⁰ セトの子孫、イエレドの子、メトシェラの父、ノアの曾祖父。その敬虔さゆえに、生きたまま天にあげられた（『創世記』5章）。

⁴¹ ノアの子孫が地上に住んだという話と、メルキゼデクが諸民族の長となる話は、聖書では結びついていない。

(4) アフロディティアンの物語

〈解説〉

アフロディティアンの物語は、新約聖書にまつわる翻訳もののアポクリファで、キリスト生誕の時にペルシアで起こったさまざまな徴と、博士たちの礼拝について物語っている。この作品は、ギリシア語の写本のなかではほとんどいつも、『ササン朝宮廷での宗教的論争』という名前でも知られている『ペルシアの地での出来事についての物語』という5世紀ビザンツ文学の作品集に収められている。この物語のなかには、ササン朝ペルシアの宮廷で、最高祭司アフロディティアンのもと、キリスト教徒、異教徒、ユダヤ人のあいだで生じた、信仰をめぐる論争が述べられている。アフロディティアンの教説の一つはスラヴ語に翻訳されている。アフロディティアンの物語はギリシア語の写本では、10世紀以降のものが知られているが、独立した物語として書き移された場合も、そのテキスト自体は『ペルシアの地での出来事についての物語』に由来するものである (Bratke E. *Das sogenannte Religionsgespräch am Hof der Sasaniden*. Leipzig, 1899)。

この物語が、いつ、どんな状況のもとでスラヴ人たちによってギリシア語から翻訳されたのかという問題にたいしては、私たちは推測することができるだけだが、テキスト学的分析にもとづく間接的な証拠から、この作品がはじめに南スラヴ圏、おそらくは古代ブルガリアで翻訳されたことがわかる。翻訳は、しかしながら、当初のかたちでは私たちの時代まで伝わっていない。一番古い南スラヴの写本 (13世紀後半) は、セルビアの短縮版のテキストである。

私たちが確かな事実としてわかっているのは次のことである。最初の翻訳における物語のスラヴ語写本は、二つのグループに分類することができ、そのうちの一方がより多くの部分でより正確に最初の翻訳を反映している。ルーシでこのテキストが知られるようになるのは、ようやく14世紀の終わりからである。そのうちの一つは、ノヴゴロドのリシツキ修道院で修道士サツヴァによって書き写されたものである (РНБ, F.I.202, л.204-206 об.)。

このテキストをほかのテキストと対照するとわかるのは、このテキストには、セルビア版や第2グループの版にはない文言がいくつもあるということである。これらの文言は、ギリシア語原典に由来するものであり、それらの翻訳は不正確さに際立っている。テキスト学的な分析をおこなうと、『アフロディティアンの物語』のテキストがギリシア語原典のテキストとつぎ合わされ、新たに翻訳され直されたり、最初の翻訳で抜かされたところが挿入されたりしている。

リシツキ修道院写本工場の活動を研究すると、14

世紀の終わりから15世紀のはじめにかけて、ここで働いていた文筆家たちはアトスと緊密な関係を保ち、翻訳文学に特別の関心をいだいていた。『アフロディティアンの物語』のテキストはギリシア語原典と照合されたが、それはリシツキ修道院ではなくアトスで行われた。このとき、ノヴゴロドの文筆家たちは注文者であり、仕事の起案者であった。この「修正された」版を私たちはノヴゴロド編纂本と呼ぶことにしよう。

『アフロディティアンの物語』のテキストは、リシツキ修道院の修道士たちの活動により、ギリシア語原典と対照させた修正があるヴァージョンが現われる以前にも知られていたが、それは第2グループの特徴をそなえたものであった。もっとも古いテキスト (РНБ, F. n. 1.39, л.56 об.-62) の年代から判断して、このアポクリファは少なくとも13世紀後半より前にルーシに流入したと考えられる。さらに14世紀の第3四半世紀以前にセルビアの文筆家によって制作された第2の翻訳の存在も知られており、それは中世ロシアの写本では15世紀後半以降のものが存在する。

マクシム・グレクはこのアポクリファを論難する特別な作品 (1520年代) を書いているが、そのなかで『アフロディティアンの物語』が聖書 (『マタイによる福音書』2章1-12節) と異なっていることを指摘している。『アフロディティアンの物語』では、2歳になっていたキリストが、東方3博士たちが自分を讃えると、地面に座ったまま笑ったと書かれている。ちなみに、中世にはキリストは決して笑わなかったという観念が流布していた。

ルカを最初のイコン画家とみなす教会の伝統があるにもかかわらず、『アフロディティアンの物語』の作者は、東方3博士たちはペルシアに自分たちで制作したマリヤと幼児の像を持ちかえったとはっきり書いている。聖母への受胎告知の話も福音書のテキストとは異なっている。Бобров А.Г. Апокрифическое «Сказание Афродитиана» в литературе и книжности Древней Руси: исследование и тексты. СПб., 1994.

〈翻訳〉

ペルシアの国で起こった奇跡についてのアフロディティアンの物語

主よ、祝福したまえ、父よ。

キリストのことが最初に知られたのは、ペルシア人からだった。その地の文筆家たちに隠されうるのは、何もなかったからである。彼らは、あらゆることに綿密に取り組み、金の板に刻みつけては、王の聖堂に仕舞っておいた。ここでは、かの地の祭司から聞いたことを少しばかり話すことにしよう。

ヘラに捧げられた聖所があり、王の家々の裏手に位置

していた。あらゆる宗教の知悉していたキュロス王⁴²が、その聖所を建立し、そのなかに自らの神々の金色、銀色の像を設え、それらを宝石で飾った。

この施設のことをこれ以上語らずに、話をつづけようと思う。板の記述のなかに記されているように、夢解きのために王が聖所に入ると、祭司のプルプが言った。「ご主人さま、私はそなたとともに喜びを分かち合います。ヘラ⁴³が懐妊したのです。」王は微笑んで彼に言った。「死んだ者が孕むことができようか。」祭司は王に答えた。「できますとも、死んだ者が蘇えり、生命を生んだのです。」王は言った。「それはいったいどういうことだ。私に話して聞かせてくれ。」

祭司は言った。「ご主人さま、真実にその時が到来したのです。ここでは、夜じゅうずっと、男や女の神像が歓喜にむせび、『行って、ヘラとともに喜ぼう』とたがいに言い交わしていました。彼らは私に言いました。『預言者よ、行ってヘラとともに、彼女が愛を受けたことを喜ぼうではないか』と。私は答えました。『誰が存在しないものに愛を寄せることができようか。』彼らは言いました。『彼女は蘇り、今はヘラではなく、ウラニア⁴⁴という名に変わった。なぜなら、偉大なる太陽が彼女に愛を寄せたからである』と。」

女神の神像たちは男の神像たちに、愛を寄せられたのはペーゲー（泉）だ、大工⁴⁵と婚約したのはヘラではないと言った。それは起こったことに賛意を示すかのようであった。男の神像たちは言った。「実際のところ、彼女を泉と名づけるのは正しいことだ。その名前はマリヤだ。マリヤは自らの子宮のなかに、大海原が船をたゆたわせるように、多くの善を宿している。もしも彼女が泉ならば、このように理解したらどうだろうか。水の泉は永遠に霊の泉を生む。その霊の泉のなかに、1匹の魚がいる。神の釣竿で釣り上げられたものだ。一たび海のなかに生かすと、自らの肉で全世界を養うことができる。かの女がほかの大工を孕んだというのは正しく言われたことだ。彼女によって孕まれた大工は、大工の棟梁の息子であり、3度の生成を経て、賢い御業によって宇宙の3つの部分⁴⁶に天蓋をお造りになり、言葉によってこの小屋を堅められた。」

神像たちは、ヘラと泉について論争を繰り返していたが、「この一日が終わるときに、われわれ皆はすべてを

知るだろう」ということには一致していた。そして、祭司は言った。「ご主人さま、今はこの場所でこの一日の残りの時間を過ごしましょう。そうすれば、起こったことの最終的な意味がわかるでしょう。神の意志で現れたことが、かんたんに起こったことはないのですから。」

王はその場に留まり、神像たちがグースリの演奏で未来を予言する様を見ていた。歌い手たちは歌を歌いはじめた。神像のなかにいた、銀色や金色の4つ足の動物や鳥が、それぞれ自分の声で歌を歌いはじめたのである。王は恐怖に囚われ、恐れおののいて立ち去ろうとした。なぜなら、彼の眼前で繰り広げられている乱痴気騒ぎに耐えることができなかったからである。祭司は王に言った。「王よ、告げ知らせたまえ。最終的な啓示の時がすでに来ています。その啓示は、神が私たちに顕わしてくださったものです。」

彼らがこのように話していると、屋根が開き、明るい星が下に降りてきて泉の像のうえに止まり、このような声が聞こえてきた。「泉よ、主よ、偉大なる太陽がそなたに告げ知らせ、そのものとともにそなたに仕えさせるために、私をお遣わしになった。無謬の書物よ、私はそなたに仕えます。すべての位階の筆頭者の御母よ、その御母は、3つの名をもつ唯一の神の花嫁である。筆舌に尽くしがたい嬰兒は、始まりと終わりと呼ばれる。すなわち、救済のはじまりであり、破滅の終わりである。」

この声が響き終わるや否や、すべての神像は倒れ伏したが、泉だけは立っていた。その像には、皇帝の帝冠がかぶせられており、その帝冠にはルビーとかエメラルドとかという名前の宝石がちりばめられていた。この宝石に加えて、一つの星が像を飾っていた。星は泉のうえにじっと止まっていた。

王は、王の領土に住むすべての人間、徴を謎解く賢人たちを呼んでくるように命じ、触れ役がラッパで彼らを呼び集めた。すべての人間たちは聖所に集まってきた。彼らが泉のうえに星があり、泉が宝石をちりばめた星の王冠を被っている一方、神像が床に転がっているのを見ると、王にこう言った。

「神と王の家系は、天と地の王の像を顕わしながら、傾いてしまいました。カリアの泉は、ベツレヘム⁴⁷の国の娘であり、冠は王の徴であり、星は地上で起こった奇跡の天における徴です。ユダヤで、ユダヤ人についての

⁴² 紀元前6世紀から5世紀にかけて、この名のペルシア王は何人かいる。マクシム・グレクがすでに、このアナクロニズムを指摘している。

⁴³ クロノスとレアの年長の娘で、ゼウスの姉にして配偶者。

⁴⁴ ギリシア語で、「天の（女神）」の意。

⁴⁵ 聖母マリヤの夫、ヨセフのこと。

⁴⁶ プラトケによれば、3つの部分とは、「水」、「空気」、「陸」である。

⁴⁷ 福音書によれば、イエス・キリストはこの町で生まれた。

記憶を覆す王国が興りました。神像が崩れ落ちたということは、神々の崇拜に終わりが来たということの意味します。顕われた者は、さらなる崇拜に値する方です。すでにあるものを覆さずに、いかにして新しき方のもとに参ることができましょう。ですから、王よ、ただちにエルサレムへ使者を送りください。受肉した万能の主の息子を見出すことができるでしょう。その方は、肉体をもつ女性の腕に抱かれています。」

その星は、博士たちが来るまで、「天の」と名づけられるようになった泉のうえにとどまっていたが、博士たちが来ると、彼らと一緒に出立した。

晩になると、この聖所に自らの軍勢を率いたディオニュソスが現われ、偶像たちに言った。「泉はそなたたちの仲間であったが、おまえたちのうえに聳えている。それは、神の受胎によって人間の本質を新しいものにしたからだ。祭司プルブよ、おまえはここにじっとして何をしているのか。書かれていたことが、我らの身におよんだのだ。我らは、力を帯びた方から、我らが偽りの夢を見ていたこと、夢を見て君臨していたこと、支配していたことを暴かれてしまったのだ。だから、余はもう予言はしない。我らから崇拜は奪い取られた。我らの栄えは地に落ち、我らから崇拜は失われた。自らへの崇拜を我がものとされるただ一人の方がおられるだけだ。」

彼らは言った。「不満を述べるな。ペルシア人たちはこれ以上、地からも空気からも貢税を受けることはできないのだから。貢税を差配される方がやってきたのだ。その方を遣わされた方に貢税をもっていくのだ。その方は古い像を作り直して、新しいものに置き換えたのだ。すでに自分の霊によってそれを行われたのだ。天は地とともに喜び、大地は誇りをもって天の祝福を受けているのだ。天上で行われなかったことが、地上で起こったのだ。祝福された階層でさえ目にすることがなかったものを、知恵のない者が見ているのだ。炎がそうした者たちを脅していたが、こうした者たちに露がしたり落ちたのだ。カリアの祝福を受けた泉がベツレヘムで生まれたのだ。泉のいかなる恩寵が天上の方に愛されるものとなったのか、いかなる恩寵が恩寵のなかに居場所を見出したのか。

ユダヤの繁栄は終わった。ということはすなわち、ほかの人々や異邦人たちに救世主が来たということだ。不幸な者たちに安らぎは増し加えられる。ふさわしく歓喜しながら、女たちは言う。『女主人、泉の方よ、飲み水をもたらし、天の明星の母となられた方よ、炎熱から守られる雲よ、全世界を変えるお方よ、自らの奴隷のことを心に留めたまえ。大切な女主人さま。』」

王は一刻の猶予もなく、自らの国にいた呪術師たちに贈り物をもたせて送り出した。星が彼らを導いた。彼らが戻ってくると、彼らの身に何が起こったのかを、彼ら

はみなに話した。王はそれを金の板のうえにつぎのように書き留めさせた。

「私たちがエルサレムにつくと、私たちとともにいた徴が人々のあいだに騒乱を巻き起こしました。『王の賢者が星とともに現われた』ことは何を意味しているのか』と、エルサレムの人々は言い交わしました。ユダヤの長老たちは、何のために私たちがこの地にやってきたかと、私たちに尋ねました。私たちは答えました。『おまえたちがメシアと呼んでおられる方が生まれたのだ。』彼らは当惑しましたが、私たちを論駁しようとはしませんでした。

彼らはこのように言いました。『それでは、天の裁きについて話してほしい。おまえたちは、何を知ったのか。』私たちは答えました。『おまえたちは不信仰という病にかかっている。誓いを立てようが、誓いを立てまいが、おまえたちは信仰をもたず、思慮に欠けた自分たちの判断にしたがって生きている。じつは、いと高き方の息子、キリストが生まれたのだ。おまえたちの律法と集会は崩壊した。習性となった魔術に骨の髄までやられたおまえたちは、この名前を聞こうとしないだろう。その名前は、何の前触れもなく、おまえたちにあらわになったのだから。』

彼らは自分たちの仲間内で相談し、私たちに贈り物をもって行かせ、このことについて沈黙を守るように求めました。彼らがこのようなことをしたのは、ユダヤ人ではない異邦人たちを慮ってのことで、自分たちが恥ずかしい思いをしないようにしたのです。私たちは彼らに答えました。

『私たちはその方に名誉の贈り物をもってきたのだ。なぜなら、その方が生まれたとき、私たちの国でこの神々しい奇跡とその偉大さについて、知らせがあったからなのだ。それなのに、おまえたちは、私たちが贈り物を持ち去らせ、私たちに天の神によって顕わされたことを隠し、王の命令に背くことを求めている。それとも、おまえたちは、どれほどの苦患をアッシリア人から受けたのかを忘れてしまったのか。』

彼らは驚愕し、大いに頼んで私たちを解き放ちました。それから、ユダヤの王が私たちを自分のもとに連れてきて、私たちと話をし、私たちを訊問しました。私たちは同じことを答えたが、彼は非常に困惑しました。私たちは彼のもとを立ち去り、彼がまるで王でないかのように、彼の言葉に何の意味も汲み取りませんでした。

私たちは、自分たちが送られるべき場所に到着し、生みし者と生まれし者を見ましたが、それは星が私たちに主の子を指し示したからです。

私たちはその母に言いました。『栄えある母よ、そなたは何という名前か?』彼女は答えました。『マリヤです。』私たちは言いました。『そなたはどこの生まれか。』彼女は

答えました。『ここ、ベツレヘムの国の生まれです。』私たちはふたたび彼女に尋ねました。『おまえは、夫をもったことは一度もないのか。』彼女は言いました。『婚約したばかりです。婚礼のまえに、さまざまなものの思いが私を不安にさせました。土曜日が来て太陽が昇ると、天使が現われ、驚くべき生誕のことで私を祝福しました。私は当惑して叫びました。決してそのようなことは私には起こりません、と。なぜなら、私は夫をもったことがないからです。天使は私に告げました。この赤子の誕生は神の意志によるものだ、と。』

私たちは言いました。『母の母なる者よ、ペルシアのすべての神々がそなたを誉れある者としている。そなたの誉れは偉大である。なぜなら、そなたはすべての栄えある者より高き者になったからである。』赤子は地面に座り、彼自らが述べていますように、満1歳を過ぎていましたが、彼を生んだ者の顔と似たところはほとんどありませんでした。彼女は背が高く、浅黒い肌の輝きがあり、丸顔で、髪の毛は束ねていました。私たちは彼らの似姿を故国に持ち帰りました。それらは、預言されたとおり、私たちの手で据えつけられました。ディオペテースの異教神殿には次のように書かれているからです。『ペルシア国家は、偉大なる王、太陽なる神のために描いた。』

私たちは、赤子を取りあげ、それぞれが赤子を腕に抱いて、私たちは崇拝しました。私たちは、この方に黄金、没薬、乳香の贈り物をし、こう言いました。

『天のイエスよ、そなたに愛をもって尊崇を捧げ奉ります。もしもそなたが来てくださらなかったならば、無秩序は正されなかったであらうでしょう。高きものと低きものはいっしょにならなかったであらうでしょう。務めが果たされるのは、奴隷を送りだす者がいるときではありません。務めが果たされるのは、ご自身が来られる時だけです。このように敵を欺くそなたの賢い巧みは、価値のあるものです。』

赤子は笑い、私たちのこの言葉を良しとして、それに返答するかのように、掌を打ち合わせました。私たちは赤子の母に跪拝し、彼女は私たちを丁重に扱いました。私たちも彼女に尊崇の気持ちを御返ししました。

そのあと、私たちは私たちが宿泊していた場所にもどってきました。その晩のことでした。恐ろしく畏怖を催させる天使が私たちのまえに現われ、こう言いました。『一刻も早く立ち去るがよい。何かの謀が、おまえたちの身に降りかからないように。』私たちは恐怖に駆られ、こう言いました。『誰が、偉大なる神の使者に企みをもつのですか。』天使は答えました。『ヘロデだ。ただちにここを立ち、安寧のなかを旅立つがよい。救われる者たちよ。』私たちは取り急ぎ、強い馬にまたがり、無我夢中でそこから遠ざかりました。エルサレムで見たことすべてについて、知らせを受けました。

キリストについてあなたたちに話せることはこれだけです。私たちはキリストを知っています。キリストは、私たちとキリストを信ずるすべての者たちの救済のために来られたのです。世々あるかぎり、キリストに栄えとその王国がありますことを。アーメン。』

刊本：

Библиотека литературы Древней Руси. Т.3., СПб., 1999. С.248-256, 395-397.

(5) アブガル王についての物語

〈解説〉

エデッサの王アブガルについての一連の伝説は、キリスト教を信奉する民族に広く流布したアポクリファ物語に属する。アブガル5世ウッカマ（在位紀元前4-紀元7年、13-50年）とキリストが書簡を交わしたという伝説が最初に書き言葉に定着したのは、メソポタミア西北部にある小さなヘレニズム国家、オスロエナ王国のアブガル大王（177-212年）の治世中である。この記録はその形態から王の「文書庫」の文書であった可能性があり、その文学的な形態は、テキストが、シリアのオスロエナ王国にキリスト教が定着した紀元2世紀末から3世紀はじめのころに成立したことを示唆している。君主とその配下にある国民が何かのきっかけで新しい信仰に改宗するという説話がさまざまなキリスト教国の文学に存在するが、この物語は、改宗をイデオロギー的に根拠づけるものとしてのそうした類の物語の嚆矢となるものである。

アブガル王についての伝説のスラヴ語版は多様であり、多くの編纂本が存在する。私たちがここで刊本として提示するのは、13世紀の写本に存在するものであるが、これはギリシア語のオリジナルテキストを自分流に翻訳、翻案したものである。ギリシア語のオリジナルは、944年の歴史上の事件との関係で制作されたと考えられている。

すでに930年代に、ビザンツ帝国の将軍ヨハネス・クルクアスの軍事的な成功により、ビザンツ帝国はメリティナとサムサトをアラブ人から奪い返した。アラブ人の占領下にあったシリアは、ビザンツ帝国の直接的な脅威にさらされた。このために、エデッサの太守はビザンツ側と「恒久」平和を結び、東方で圧倒的な知名度を誇った聖遺物、イエス・キリストの人の手によらない聖画像を引きわたさざるを得なくなった。

聖遺物を奪い返したという事実は、アラブ世界との戦いにおけるビザンツ側の成功を象徴し、将来のあらたなる成功を高らかに告げ知らせるものとなった。このために聖像の搬送と、コンスタンティノープルでの出迎えが華やかに演出されたのである。この事件は、アラブの歴

史家、アンティオキアのヤヒヤ、ビザンツの歴史家、テオファネス、ゲオルギオス・ハマルトロスが記録している。

イコンのコンスタンティノーブルへの受け入れを記念して、ギリシア教会はコンスタンティノーブルにイコンがもたらされた8月16日を、「3番目の救済」という名の特別の祭日に定めた。ギリシア語の写本の伝統においては、この事件について書かれないいくつかの文学作品が残されている。たとえば、偽コンスタンティノスの『物語』、その短縮化された叙述である暦聖者伝の二つのテキストがそれである。

しかしながら、アブガル王の伝説と結びついたスラヴ、ロシアの写本を調べてみると、ギリシア語には、キリスト聖像画のコンスタンティノーブル搬送をめぐるテキストがもう一つあったことがわかる。ギリシア語のオリジナルテキストは私たちの時代まで伝わっていないようであるが、そのスラヴ、ロシア語版はいくつかの写本で知られている。

私たちが出版するテキストは、ギリシア語テキストのスラヴ語の翻訳にもとづいて校訂されているが、このテキストは偽コンスタンティノスの『物語』を基にして制作され、私たちに暦聖者伝として知られているテキストと近い関係がある。しかしながら、13世紀のこのテキストは、思想的、文体的にかなり入念に手が入れられており、これは中世ロシア版の文筆家が企図したものと思われる。

文筆家は史料に自由に向き合い、積極的な役割を果たしているが、それはなによりも、彼が物語に新しい人物「速描きの絵師」ルカを登場させていることにはっきりと現れている。ルカは、人の手によらない聖像画が現われたという筋のなかで、アブガル王の使節であるアナニイの代わりになっている。

私たちの版で重要な登場人物としてルカが現われたのは、もう一つのスラヴ語の著作、ブルガリア祭司のアポクリファ集成である『エレミヤの説教』の影響である。中世ロシアの文筆家はこの作品を高く評価し、そのためにブルガリアの『説教』から、人の手によらない聖画像は使徒ルカの関与によって生まれたという着想を借用したのである。

この版の編集者の「創造的な」役割は、いくつかのエピソードの自由な解釈に現われている。中世ロシア版では、エデッサに行く道すがら、聖画像によって足なえが

治癒する話が現れるが、このエピソードもそうした「創造的」成果の一つである。また、作者は、奇跡によって不具者が治癒したことについて議論をする町の住人たちの対話を導入することによって、語りをドラマタイズしているし、自らの治癒にかんする足なえのモノローグもテキストのなかに現われている。さらに、エデッサからペルシア人が退却する情景や、人の手によらないイコンがコンスタンティノーブルに迎ええられる光景が、ロシア年代記の伝統的な筆法で描かれている。

編者がテキストを自由に改変していることは、また、アブガル王が町の門のうえに掲げた教訓的な言葉を、編者がさらに詳しく具体的に述べていることにもあらわれている。そこには、詩篇からの引用（65篇6節「地のあらゆる端々に望みを」）が挿入されている。また、このテキストには、誇張されて叙事詩的にさえた、数々のビザンツ聖職者にたいするルーシの人々の観念が反映されているが、それと似たようなものは、1200年にツァリグラードに旅したノヴゴロド人、ドブリニャ・ヤドレイコヴィチの『巡礼記』にも見出すことができる。

13世紀ルーシ写本に見出される、アブガル王にかんする伝説の言語と文体を分析すると、この作品は、現存しないギリシア語原典テキストの独自の翻訳、翻案であり、そのさまざまな特性によって、モンゴル襲来前のキエフ時代の作品であると結論することができる。

E.H.メシチェルスキは、ロシア国民図書館（サンクト・ペテルブルグ）所蔵写本F.п.I.39., лл.62об.-68.に拠ってテキストの校訂をおこなった。

〈翻訳〉

8月16日、我らが主イエス・キリストの人の手によらない聖画像がエデッサからツァリグラードにもたらされたこと。

主よ、祝福したまえ、父よ。

神にして我らが救世主、イエス・キリストの恩寵そのものについて語らなくてはならない。

イエス・キリストがたくさんの素晴らしい奇跡をおこし、すべての民にイエスのことが知られるようになると、黒い癩の病に病み衰えた⁴⁸エデッサの王アブガル⁴⁹がこのことを耳にした。彼は自分の目で創造者そのものを見たいと思ったが、それが叶わなかったので、アブガルはイエスに懇願の書簡を送り、次のように言った。

⁴⁸ ほかのもとと後代のギリシア語版の伝説がアブガルについて語るところによると、このエデッサの王は癩病を治そうとあれこれの治療を試してみたが、かなわなかった。6世紀のビザンツの歴史家のカエサレアのプロコピオスは痛風を病んでいたと伝えている。

⁴⁹ シリア語版の伝説によれば、主たる登場人物はアブガル・ウッカマ（黒いアブガル）である。アブガル・ウ・バル・マヌは、紀元前132年から紀元242年までオトロエナでつづいた王朝の、28人いる王の一人であり、名前自体は「足なえの」を意味し、アラム語の碑銘では「バリミラ」、「ネラブ」で現われる。

「主よ、私はそなたと、言葉だけで起こすそなたの治癒の業について聞きおよんでおります。そなたは病者を快癒させます。⁵⁰ 盲には目が見えるように、跛には歩けるように、聾啞者には耳が聞こえるようになるのです。血のとまらない女をそなたの服に触っただけで治し⁵¹、死者を復活させました。私はそなたのことを耳にし、心の底から、そなたが天から降りた二人の方の一人であること、そなたが神の子であることを知っています。また、私はユダヤ人たちがそなたに不満をいだき、そなたを殺そうとしていることも知っています。私の町は大きくはありませんが、そこに住む人々は善良です。この町は、私たち二人にとって居心地がいいでしょう。」

イエスは、アブガル王がイエスに送った使節アナニイ⁵²に言った。「まずは知るがよかろう。私を見ずにそなたが私を信じたのだから、そなたの行く末には健康が用意されている。私はすべての真実を成し遂げるために送られ、そのあと、私が降りてきたところに昇ることになる。ここに私の弟子の一人、ファッデイ⁵³を送る。この者がそなたの病を治すように。」

アブガル王はこの言葉を聞くと、絵を描く術に長けた絵師をエルサレムに送った。この絵師がひそかに布地にイエスの絵を描くためにである。ルカ⁵⁴はエルサレムに着き、イエスが教えを述べている会堂に入り、すこしはなれた場所に立ってイエスの顔をふつうの絵の具で描きはじめたが、人間には描きえない神のロゴスを描くことができるか、心配でたまらなかった。しかしながら、秘密を知る方がひそかに行なわれていたことを明らかにした。イエスはすぐさまルカに呼びかけて次のように言った。「ルカ、ルカ、アブガル王の遣いよ、私に布地をわたすがよい。」

そして、ルカは会堂に入り、イエスに布地をわたした。イエスは水を持ってくるように言いつけると、清浄きまる自らの顔を水で濡らし、それを布地でふき取った。

おお、何という奇跡だろうか。考えられる以上のことが、理性を超えることが起こったのだ。ただの水が絵の具に変わり、布地に触れると、布地のうえで固まり、布地のうえにイエスの御顔が現れたのである。人々は驚愕し、畏怖に捕えられていた。イエスはそれを使徒ファッデイにわたし、彼をエデッサの町に送った。

エデッサの町では、病んだアブガルが6年間寝台に横たわっていた。遣いのルカはファッデイとともに、人の手によらないイコンを携えて出立した。彼らはイエラポリという名前の場所に到着し、町の外の宿屋にとどまった。二人は心配だったので、主のイコンを2枚の粘土板のあいだに挟んで隠した。すると、天から火の柱が現れて、主のイコンが隠してあったその場所の上に聳えあがった。

町の見張りはこのような奇跡を見て、大きな声で叫びはじめた。町にいた人々はみな、この叫び声を聞き、心配になったので、町は騒乱状態になった。ファッデイとルカはすばやく主の聖像を持ち出し、自らの旅程を進めた。町の人々が火の柱があがった場所に来てみると、恐怖を催し、面を伏せて倒れ伏したが、目を上げてみると、ある岩にあの主のイコンの姿が象嵌されているのに気づいた。彼ら町びとたちは刻印された部分を切り出して、町に持ち帰った。

彼らが町の門を入ったとき、盲人、足萎え、悪魔つき、癩病病みが集まってきて叫びながらこう呼びかけた。「イエスさま、救世主なる至高の神よ、われらを憐れみたまえ。」そして、主のイコンの似姿に触ると、快癒をえた。町の人々はこの奇跡を目の当たりにし、仁慈かぎりない神をたたえ、聖なる三位一体、父と子と聖霊を信じるようになった。

ファッデイが遣いのルカとともにエデッサの町に近づき、町から1ヴェルスタのところに来た。すると、足萎えが這ってこちらにやってきて、主の使徒たちを見ると、

⁵⁰ 『マルコによる福音書』4章24節。

⁵¹ 『マタイによる福音書』9章20-21節、『マルコによる福音書』5章25-34節、『ルカによる福音書』8章43-48節。血のとまらない女は、生理の不正出血に悩んでいたと思われる。カエサリアのエウセビオスは『教会史』のなかで、パニヤス（カエサリア）の地方の伝説を伝えているが、パニヤスにはそのころにはまだ、福音書の血のとまらない女と関係があるとされる銅像が立っていた。この銅像は、血のとまらなかった女が感謝のしるしとして、キリストとそのまえにひれ伏す女自身を描いたものであった。

⁵² シリア語版ではハナンであり、その肩書は文書庫の管理官で、王が信頼を置く人物であった。アナニアの名は、カエサリアのエウセビオスのギリシア語訳（1章12節）に由来し、そこでの肩書は「使節」ないしは「書簡使節」である。

⁵³ シリア語版ではアッダイ。カエサリアのエウセビオスの翻訳で、アッダイの代わりにファッデイが用いられている。それは、使徒の名を用いることでアブガル王の改宗の物語により大きな権威を付与するためである。エデッサ市民をキリスト教に改宗させたのは、完全に使徒ファッデイによるものとされている。ファッデイの名は福音書のテキストから借用されたものである。

⁵⁴ スラヴ語版に使徒ルカの名前が挿入されたのは、彼が画家であったという伝説があったからである。初期キリスト教文学においては、ルカは腕の立つ医師として知られていた（『コロサイの信徒への手紙』4章14節）。ところが、6世紀くらいからルカが画家だったという伝説が現れるようになる。歴史家のテオドロス・アナグノストスは、皇后エヴドキアがエルサレムから福音書作者ルカによって描かれた聖母像を送ってよこしたという記事を書いている。ニキフォロス・カリストスが伝えるところによれば（『教会史』6巻16章）によれば、ルカはさらにいくつかの作者として認知されていた。

叫びはじめた。「主よ、憐れみたまえ。」主の聖画像をもっていた主の使徒がこの者に触れると、足萎えはしゃんと立ち、使徒たちに先立ってすばやく町に駆けこんだ。彼を見て、すべての町の人々が驚いて言った。「これは、膝でいざり歩いていた、あの寡婦の息子ではないのか。」ある者たちは、「それに違いない」と言ったが、「彼に似てはいるが」という者もいた。人々はすぐにこの男についてアブガル王に報告した。

王はこの男を近くに召し訊ねた。「誰がお前のことを治したのか。」若者は答えて言った。「私が町から1ヴェルスタの場所にいて通りがかりの人々に喜捨を乞うていたところ、ある人が連れとともに歩いていました。私はその人たちに喜捨を乞いました。その二人連れの一人が私に触れたら、私はしゃんと立ち上がって、陛下をご覧のとおりすっかり元気になったのです。」

アブガルは、それはキリストではないかと考えて、大勢の従者たちを出迎えのために送った。彼らが歩いていると、人の手によらない救世主の聖画像を携えた使徒たちに出会った。彼らがアブガルの宮廷に到着すると、王は病気のために6年間寝台に横たわっていたが、イエス・キリストの像が描かれた布地を見ると、たちまち喜びのあまり、いままで自分が寝ていた寝台から少しだけ起き上がろうとした。すると、そのまま寝台から起き上がってしまい、一瞬のうちに全身が健康になり、いままで病み衰えていたのが嘘のようであった。

彼は癒されがたい苦しみから解放され、いと清らかなる聖画像のまえに倒れ伏し、愛をもって聖画像に跪拝した。そのあと、アブガルは使徒ファッデイに言った。「余は何をすればいいだろう。」使徒は彼に言った。「十字をお切りなさい。」彼はエデッサの町で妻と子供たちとともに洗礼を受け、使徒は彼の家にかかわるすべての人々に洗礼を授けた。

町全体が父と子と聖霊の名において洗礼を受けた。アブガル王は、謹みふかく神聖なる場所を設け、キリストの絵が描かれている、いと清らかなる妙なる布地を町の門のうえに掲げるように命令した。王は、町に入る、あるいは、町から出るあらゆる人間ははじめにこの聖なる栄えある聖画像にお辞儀をし、しかるあとに町に入るなり町から出るなりするようという触れを出した。

この聖像のうえにはかくのごとく書かれていた。「仁慈深き主、キリスト、われらが神、世界のあらゆる国の望み、われらを憐れみたまえ。なんとすれば、われらはそなたを信じるがゆえに。そなたに望みをかけるあらゆる者が、その望みのなかで誤りを犯すことはありません

ように。」

多くの年月が経って、何某という偶像崇拜者がこの町で権勢を振るうようになった。彼はこの神々しいキリストのイコンを破却し、そのかわりに醜悪な偶像の悪魔の彫像を立てようとした。このことを知って、町の主教はひとつの企てを思いついた。救世主のイコンがある場所は、場所が岩のドームのように丸かったので、夜、誰もが知らないときに主教が行って、神々しいイコンのまえにろうそくをともし、レンガで場所をふさいでしまった。主教は、イコンの描画を石板と石灰で囲み、壁を平らにした。こうしてイコンは見えなくなってしまったので、不信心なこの男はそのよからぬ企みをあきらめた。彼は言った。「あのような宝物がどうして見えなくなってしまったのだろう。」

そのあと多くの年月が経ったのち、ペルシア人たちが来襲し、力攻めでエデッサの町を占領しようとした。町の人々は、涙を流して神に向って叫び、神の慈悲と助力を求めた。するとたちまち救いが得られた。

ある夜、エヴラリヤというエデッサの町の主教の夢枕に光に包まれた女性が現われ、主教に言った。「城門のうえに救世主キリストの人の手によらぬ聖像画が隠されている。それを持ち出せば、そなたはたちどころにこの町とその民を災厄から救うことができるだろう。」そして、その女性は主教にその場所を示した。主教は大いに喜び、夜が明けるとすぐに、城壁を掘りかえしてみると、人の手にならぬキリストのいと清らかなる画像と燃える蠟燭とを見つけ出したのである。イコンを隠すために積まれていた煉瓦にも、当初の画像とは分かれ難いもう一つの画像が刻み込まれていた。

おお、なんとという奇跡であろう。何年ものあいだ、その蠟燭は消えることはなかったが、その宝物は見出されなかった。主教がいと清らかなるそのイコンを持ち出し、城門のうえに立ってその手にかの敬虔なる人の手にならぬキリストの聖画像をもち、その腕を上方に差し伸べると、まるで火で追われるかのようにペルシア人は撃退された。そして、このように惨禍を被り辱めを受けたペルシア人は、エデッサの町から退却したのである。ある者は死に、ある者は打ち殺された。

しかしながら、この聖なる主の画像は、栄えある神に守られた町コンスタンティノープルにあるべしという神の御心があった。その当時、権勢をふるっていたギリシア人の皇帝ロマン⁵⁵が、2千リトラの金、1万リトラの銀、2百人のサラセン人⁵⁶と貴顕をエデッサの町の王のもとに送り、王が皇帝にいと清らかなるイコン、主の

⁵⁵ ビザンツ皇帝ロマン1世ラカペノスのこと。

⁵⁶ リトラはギリシアの重さの単位で、12オンスに相当する。ギリシア人はこのイコンにたいして、200人のムスリムの捕虜と1万2千銀貨を支払ったことが知られている。Васильев А. А. Византия и арабы. СПб., 1902. С.252.

聖像画を送るように求め、もしも願いがかなうなら、皇帝はエデッサ王に永年の平和を結ぶことを約束した。

皇帝は、この素晴らしい、奇跡の大いに讃えられる宝物を求めてエデッサの町に百人の主教、2千6百人の司祭、4万人の輔祭、その数を言うことができないほどの修道院長と修道士たちを派遣した。彼らはエデッサの町に到着すると、いと清らかなる主の聖画像を持ち出し、涙に暮れて詩篇を唱え、賛美歌を歌いつつ、「おおご主人さま、主よ、憐れみたまえ」と叫んだ。

彼らがギリシアの国に近づくと、皇帝と総主教は彼らが人の手にならぬ聖画像を携えて自らの国に近づいていることが知らされた。皇帝はすべての貴族たちとともに、総主教はすべての合唱隊とともに、民衆は数え切れぬ男たちや女たちがこぞって出迎えた。蠟燭を灯し芳香を漂わせた船が海を覆った。彼らは集まると、口々に叫んだ。「慈愛あふれるご主人さま、それにふさわしくないそなたの僕である私たちのもとに赴くことを決めたお方、そなたに栄えあれ。キリストよ、そなたのご意志に栄えあれ。なんとなれば、そなたはすべてを人間のために備え、救済を準備してくださるからである。」

みな町に入ると、総主教は頭上に、この世界よりも尊い宝物の入った金の聖龕を掲げた。民はそのあとにつき従い、「主よ、憐れみたまえ」と叫んでいた。「私たちの神たるが明らかなるキリスト、来ませり」と、さまざまな歌を歌う人々もいた。大きな声で次のように歌う者たちもいた。「喜ぶがよい。コンスタンティノスの町よ。皇帝たるそなたの救い主が来られたのだから。かつてエルサレムでそうであったように、子ロバに乗ってではなく、私たちを悪しき偶像から救いたまうことを欲して、いと清らかなるイコンのなかに身を置きもうたのだ。」

数限りない多くの病者たちが、治癒を授けられた。盲は目が見えるようになり、聾は耳が聞こえるようになり、跛はシャモアより速く走れるようになり、啞はしゃべれるようになり、悪魔憑きは快癒した。みなは大きな声で叫んだ。「コンスタンティノスの町よ、叫びと喜びを受けるがよい。そなたロマンよ、ポリュフィロゲネトス家の皇帝よ、自らの帝国を確固なものとするがよい。」そして、8月16日、神の叡智の教会に入り、この敬虔なる宝物を受け取った⁵⁷。皇帝も聖職者もすべての者たちも喜びをもって跪拝し、接吻し、金の聖なる箱に宝物を収めた。

ここから、神にして人間たるキリスト、我らがほんものの神の肖像の神々しい絵姿の到着の華やかな儀式がおこないながら、我らは大いに祝い、父と聖霊とともにそ

の誉れを称えたのである。

刊本：

Библиотека литературы Древней Руси. Т.3., СПб., 1999. С.276-281, 400-402.

⁵⁷ 聖像は944年8月15日にコンスタンティノーブルに入りまずはブラケルナイ宮殿に入った。翌16日、ロマン・ラカペノスの息子ステファン、コンスタンティン、その女婿コンスタンティン・ポリュフィロゲネトス、総主教テオティラクトスを先頭とした華やかな行進で、聖ソフィア大聖堂に運びこまれ、そこから聖母ファルの宮廷つき聖堂に運びこまれた。A. A. Васильев. Византия и арабы. С.255.